

マーランで避難

平安座島 玉栄ヤス（三十六歳）

民間人の軍事訓練

戦争の始まる前は、どこでもそうだったと思いますが、処女会、婦人会、青年会、向上会が各自にあって消防訓練や竹ヤリ訓練を字の区長さんの命令でやっていました。学校での空襲に対する訓練は、私の長男、長女がそうでしたが消防訓練や学校から各自の家まで、深いみぞを掘って、爆撃のあった場合は、身を隠せることができるように穴を掘らされておりました。学校に空襲があった場合でも、そのみぞを伝って家に帰れるような訓練をしておりました。

壕は、山の手の方に自然壕を利用しながら各人掘ってありました。それは、宇の区長さんや、役場のかたの命令でやっていたはずです。日本軍は、島には入っておりませんでした。十・十空襲後は、軍人が四、五名位入っていたようです。

十・十空襲の時は、大変こわかったです。空襲の二、三日前から、敵が空襲するかも知れないという情報が、どこからともなく流れていきました。私たちは敵の空襲に備えて、竹ヤリ訓練を通して、敵が来たら一人でも、竹ヤリで殺すように教え込まれていましたから、そのうわさが流れてからは、だいぶ気がたかぶりました。今、思い出すとおかしい話ですが、戦争を知らない私たちは、きょうは竹ヤリ訓練だよと云われると、みんな学校に集まって、二〇名位ずつ組んで、前の列の人たちが、蔣介石の人がお絵をかいてある板めがけないで、

は、「演習だよ」と云って、田んぼの方へ行きました。私は、もう一度、西の空を見上げると、そこは読谷飛行場の上空の方で、大きな真黒のキノコ雲がいくつも見えたので、これは、間違いなく空襲だと思い家路を急ぎました。

家の近くまできて、ふりかえってみると、新里のおじさんは、水を汲まないで、さらに西の方の海岸べりにすわって、西の空を見上げていました。きっと、演習だと云つたものの不思議に思い、気になつたんでしょう。戦争には一度もあつていなから空襲とも知らないで。

私は、あわてて家にかけこんでいましたが、その頃までには、隣近所のおばあさん達も気がついて、平気でみている人、心配そうにみている人や、「空襲だ」といつて、山の手の方の防空壕に衣料品を運び始めている者もあり、村は大騒動になり始めたところでした。

家で、私が「おじいさん。おー、空襲ですよ」というと「これは、空襲ではないよ」と返事したので、なおも「いや、これは空襲ですよ」というと、おじいさんは怒って「ヤナヒヤー、（こいつ）、女のくせに空襲」というものがどんなものかちゃんとわかっているのか」とどなる始末でした。

「でもなんで急に、沢山の飛行機が飛びかい、西の方で爆音や、『ボーン』という爆発音が、連続して聞こえるのですか、西の空には、花が咲いているようにきれいなものが一面にあがっているがれは何ですか」と云いました。

私は、落ちついておれなくなり、子供たちの大切なものは、すぐ

て、竹ヤリを突き立して行くのを見ようまねで後に続くという訓練でしたから。

平安座島十・十空襲

私は、その日の朝早く起きて、田んぼに井戸から汲みあげた水を入れる作業をするために、ひとりそこのでかけました。平安座の田んぼの水は、全て井戸から汲み上げなければ、水はなかつたのです。「ヤマジョウ」というつるべで、水を汲みあげる状態でした。「ヤマジョウ」はひとりで、汲みあけることができます。二人で汲み上げるのは、桶の両端にヒモを通して、二人で、それぞれのヒモを持って汲み上げるようになつてありました。

私は、ひとりでひと汗かく程度水を汲みあげると、上空で「グングング」と音がするので、何げなく空を見上げると、なんと、無数のトンボが空を舞っているように、空一面飛行機が飛んでいました。それまで、かすかに爆音が聞こえていたけど、まさか空襲とは思いも寄らなかつたのです。

飛行機が、だんだん大きく見えるにつれて、これが空襲というものかも知れないと思い、水汲みをやめ、からのバケツひとつかかえて、あわてて家へ帰ろうとしました。

すると途中で、向こうから帽子をかぶつてコウガアキイ（ほおかぶり）した新里というおじさんが、バケツをわきにかかえ、田んぼに水あげにいそいそとやってくるのに出会いました。

「エー、オトウ！（おじさん！）」、これは空襲といふものではないですかね」とたずねますと「ウレエヒヤー演習レルヒヤー（これ

を持ち出せるようだひとつにまとめてあつたから、それを取り出していると、おじいさんは、また「おまえは、空襲といつているが、何んで男よりも、よくわかるのか。みんなは演習といつているではないか。おまえには、敵がどこで何をしているかがわかるのか。そんな心配するよりも、早く朝ごはんを食べなさい」といいました。

私は、朝ごはんを前にしても、全くのどを通らなかつたのです。私の庭先には、防空壕が掘つてあつたので、フトンなどをその壕へ入れる準備をしていると、おじいさんは「食事もとらないで、いらんことをして、ごはんを食べなかつたら何もできないではないか」とあきれています。

私たちは、三か所壕を掘つてありました。一か所は家のすぐ西側に横穴を掘つてあり、もう一か所は山の手の大きい壕とまたそこへ行くのが間にあわない場合に備えて、大きな岩を利用して掘つた壕が三か所ありましたから、私の妹に、長男、長女を連れていき柳谷おりを運ぶのを手伝つてくれないかと頼みました。

ところが私の父は、サバニ（くり舟）で渡し船業をしていたので、その舟をみに海岸へでかけてしまつてました。それで私は、父を連れに行つたところ、子供たちは、母と一緒にないと自分たちだけでは壕にはいられないといって泣いて、妹とはぐれてしまつてました。道中にいる子供たちをみつけて、壕に避難しましたが、案の定、その日の正午頃から、初めて平安座島は空襲をうけました。

この空襲で、平安座島の部落の殆んどが焼かれてしまいました。特に学校に近い西側の住居は、丁度私の家を境にして全部やられま

した。私の前の家は、大きなカヤぶきの建物でしたが、運良く類焼をまぬがれました。

しかし、さおに干してあった洗濯物は、全部焼けておりました。家が焼けなかつたので、本当に助かりました。

しかし、私の父の家は焼かれてしまい、どうしたらいいのだといつて泣いておりました。

これは演習だといはつたおじいさんは、海岸近くで山原船が数隻、爆撃されて炎上してしまい、そのうえ機銃の弾丸が「ピシッピシッ」と自分の近くに飛んでくるのをみた時になって初めて敵の空襲だということがわかり、あわてて、私らのいる壕に逃げ込んでいました。そして戦争というものは本当に恐ろしいもんだと青くなつて話しておりました。

しかし、この十・十空襲は、殆んどの人が、目の前に弾が落ちてくるまでは空襲だと信じることができなかつたのに、死傷者がひとりもいなかつたのは、不思議でした。

でも、爆撃で何か所も大きな池みたいな穴が屋敷や畑にできましたので、村中総出で、その穴うめ作業や、焼かれた家の普請をカヤを刈つてきて共同作業でこしらえました。

平安座は、読谷飛行場爆撃の行きかえりのとおりみになつてい

て、その都度、ついでに爆撃を加えられたようです。それでも、そ

の後、何度も空襲はありましたが、死傷者は出ませんでした。

山原船で疎開

私は、このような爆撃を受けてきたので、非常に警戒心を持つ

山原は、爆撃が殆んどなかつたとはいえ、山の中に逃げ込んでも、土はやわらかく、大きな石もないのに、壕を掘ることができず、もし山の中に空襲を受けたら、平安座島にいた時より危険だと思い、いつもびくびくしていました。山中深く、避難小屋を作つてあっても、雨露をしのぐ程度のものでした。特に上陸空襲の時は、心配でしたらが、山が深いので空襲は受けませんでした。

ただ友軍がいそなところだけが爆撃を受けたようで、爆風を感じることもありました。

しかし、アメリカ軍上陸後は、日中は、山の奥深くに作つてある避難小屋に閉じこもつて、村に下りることは、こわくてできませんでした。夜になると、二時間位かかるて村へ下りてきてみると、いつもアメリカ兵に荷物を荒らされておりました。屋敷の大きな松の根本に穴を掘つて、衣類などを入れたこおりをうめておくのが、引っぱり出されて、あたり一面に衣類をちらかし、池の水の中に放り込んでしまった。家の中に、おいておくと、もし家を焼かれたら、大変だからと、用心して特に大事なものを、こおりを入れて、小さな穴に入れてあつたのです。きちんとしまつても、翌日の晩、きてみるとまた荒らされているという状態が、何回も続きましたので、屋、山を降りるということは、こわくて全くできませんでした。

私の場合、夜でも、子供を山から下るすということはこわくてできませんでした。こんなにつらいことはありませんでした。何十世帯の人たちが、あちらこちらに避難小屋を作つて生活していたにもかかわらず、この汀間の奥の山中では、日本兵にもアメリカ兵に

ようになりました。ヤンバル（園頭）に疎開した時、空襲を受けたことのない人は、「むやみやたらに爆撃するはずがない」といつて、飛行機が飛んできても、家中で、普段のとおりの生活をしていました。そして私らが、爆音をきいただけで、すぐに避難するのをみて笑っていました。そのうち、となり村が、初めて爆撃されたのをみてからは、私らと一緒に避難するという状態でした。

その後、平安座の住民は約半数が、山原方面に疎開しました。私は昭和三十年の旧正月を済ました直後に、家族六名（夫の両親、子供二人、私と私の妹）山原船（マーランブニ）で持てるだけの家財道具をつみ込んで疎開しました。途中、空襲にあいはせぬかと大変心わかつたです。無事、漢那に着いて、それから自分たちだけ、徒步で荷物を担いで目的地の三原の宮里さんの家に行きました。前もつておじいさんのサバニで、衣類や食糧は、一部運んでありましたから助かりました。

疎開せずに平安座に残つた人たちの生活は、自然壕や墓をあけて、そこに屋は入つて、夜になると、部落の方へやつてきて、夜中に月明りのような照明弾の明りのなかで、イモ掘りをしたりして翌日の分の食べ物を洗つて炊いて、夜明けがたには、また壕に帰れるという生活だったようです。

私は、宮里さんが、受け入れの準備をしてあるからおいでといふたよりで尋ねてきました。宮里家は財産があつたので畠のとりいれや植付けの手伝いなどをやつておりました。

山原でも夜の内に食物を炊いて、夜の明けない内に避難小屋へ持つていく生活でした。

山原は一度も会いませんでした。

空襲だけの間は、三原からそう遠くない山中に避難小屋を作つて、生活しておりましたが、アメリカ兵が、入つてきたという情報で更に山ひとつ越えた奥の方へ避難小屋を作りました。飯の炊き出しのために夜になると、はるばる村へ帰つてきて食べ物を炊いて明けがたに持つて帰つたが、時には土地の人が、どことこに炭焼小屋があるからと教えてくれて、その炭を盗んで、鉄製の七輪に、おつゆなどを炊くということもありました。

山原の山は、ハブだらけだという話でしたが、足がめりこんでしまった位の深い山を、夜も昼も歩いても、一度もでくわしたことがない、またそのような話を一度も聞いたことがないのは、本当に不思議でした。一度でもハブをみたら、夜、山原道を歩くことはできなかつたかも知れません。

平安座でも、村民の中には家で寝ていても、畑作業をやつていても、夜道を歩いていてもよくハブにかまれた人がいたもんですが、空襲時代になると、十・十空襲以後、家に寝るのが恐なくて、ずっと山のハブの出そうな壕のなかで生活を送りましたが、ハブは一度もみかけませんでした。本当に不思議です。

私は、木の根、草の葉をかじつていても、アメリカ兵が、村内を徘徊していても、日本軍が、戦争に負けるという気は、一度もませんでした。

しかし、六月になると山をおりて村の住居に帰つてもアメリカ兵は、どうもしないというわざが、山の中にも次第にひろまつて行き、住民が次第に山を降り始めたので、私も思い切つて山を降

りました。

砲弾の中をサバニで帰島

おじいさんのサバニが、ちゃんと残つておりましたので、村には、ほとんど滯在せずに、すぐに平安座島へ帰ることにしました。

私たちの家族六名以外にも、他の人も乗せたので十名位も乗つて、汀間の港を夜中に出発しました。まだ戦争が終っていない時だったで、漢那沖あたりで、砲弾がサバニの近くに落ちたので、「ドーン」という音がして、舟が大きく揺れたので、生きた心地がしませんでした。

平安座島の疎開民が、やはり山原から、サバニで平安座へ引揚げてくる際の家族は、母親と子供四人の家族だったそうですが、平安座—桃原間にさしかかった際、そのサバニにアメリカ軍の戦車の中から手榴弾が投げこまれ、母親は死亡して、子供たちは負傷してしまった。それをアメリカ兵が救い出して、子供たちを平安座島の病院へかつぎこんできただそです。明けがた近くだったので、日本軍の特攻隊と間違えられたのではないかということでした。

こういう危険なところでしたが、二回程近くの海上に砲弾が落ちてきた程度で、無事、平安座島にたどりつきました。

それでも、子供達はともかく、私達に較べて、那覇あたりから避難民は本当に氣の毒でした。県庁なんかに勤めている人が、「イモの皮でもいいから下さい」といつて、物もらいしながら、さらに北の方へ疎開していく人をみると、涙がでました。

飛行機が飛んできたので、爆撃されると思い、二人一緒にそばのみぞに頭から突つこんで、われ先にみぞの下にならうと二人でもがいていました。飛行機が去つてしまつて、お互いのどろだらけの姿とがいたことを思い出して、おかしくなつて大笑いしました。

平常であれば、誰もこんなきなきないみぞの中へ、しかも、何がいるかもわからんところへ、われ先に飛び込んで、あらそつてまで下へもぐり込もうとするはずがないのに。戦争って本当にいやです。

米軍の陣地構築作業員として

平安座島 中 村 光 雄 (三八歳)

平安座大収容所

私は、久志の方に疎開していましたが、アメリカ軍上陸後一か月も経つと、浜に置かれている主のわからないサバニ(クリフ)を失敬して、それで平安座島に引き揚げてきました。そのサバニはどうなつたか、わかりません。私らが、平安座に帰つてると、伊計島、宮城島、屋慶名、平敷屋、具志川、などから捕虜にされた住民が収容され、約七千人に人口があがつてきました。

食糧の運搬は、最初のうちは、屋慶名—平安座間の海上を潮につかりながら、歩いて運ばされました。船は、絶対使わなかつたです。何十回かがされたかわかりません。

平安座島は、大収容所に使われ、軍病院、食堂などがあつて、アメリカ軍の部隊もありました。金城紀光という有名な医者が、民間

私は疎開先の村には、かなりの田畠があつたので、乳のみ子もないから、空襲がない時は、田や畑をたがやして、稻やカズラを植付けたり、また、山の中から田んぼに入れる堆肥をモックでとつてきました。イモ掘りをしたりいろいろな仕事を地元の人と一緒に十分やつっていましたので、気兼ねすることもありませんでした。私たちのいた部落は、小さな部落でしたから、イモや野菜などを収穫したらすぐその後からカズラをどんどん植付けていきました。

私は、ヤンバルにいる間は、日本兵にもアメリカ兵にも、一度もあいませんでした。特に子供たちが、アメリカ兵に見つからないように、大変気を使いました。

というのは、中国大陸から帰ってきた在郷軍人の人たちから、日本軍が、支那人を「チャンコロ」と呼んで、大変ひどいことをしてきました。アーリカ軍は、むしろ親切で日本軍の方が恐ろしかつたという話をいろいろききました。

本当に戦争というものは、二度とするもんではありません。

平安座島にまだいる時、その時すでに、山の手で壕生活をしていました。ある日、友だちが、「夕方の五時以後は、絶対に空襲はないから、村へ行つてみよう」と誘われて、山をおり始めたところ、突然、

人の治療にあたつていました。

なにしろ、平安座市として、市会議員までいたぐらいですから。軍病院があつたから、若い人や、子供持ちでないちょっととかしこい人は、病院の手伝いを希望して、その後、立派に看護婦となつた人が、かなりいます。出世した者もいます。

一件の家に、七〇名位入居していて、更に天井板をはがして空地に板小屋を作つたりして、すきまがない位、ぎつしり人がつまつていました。そういうところを医師と看護婦が治療に回つていました。平安座に帰つてからは、殺されるという心配もなく、食糧もあつたので安心でした。

国頭疎開

やはり、山原に疎開していた頃、一番首里、那覇方面の人が可哀相でした。親にはぐれた七、八歳の子供が二人、泣きわめいて、道路を走つているのをみかけましたが、可哀相だなあと思う位で、どうにもならなかつた。

なにしろ、食糧難でしたから。小さな子供どうしだけで歩いているのを二、三回みかけましたが、何故、親とはなればなれになつたかといふと、それは、若い母親などは、アメリカ兵が近づいてくると、暴行されるのを恐れて、子供を放置して、山の中に必死に逃げこんだもんです。こうして親子がはぐれてしまうことが、よくあつたのだ。

実際アメリカ兵は、これは若い女だなあと思うとつつかまえよつたから。

私は、軍属ではあつたが、マーランブニ（山原船）の船頭だった。召集はまぬがれました。

私は、与那原方面に、漢那から防空壕用の資材を運搬していました。また平安座島からの疎開民も私が運びました。一隻の船で五百名位運びました。

当時二千五百名位の住民は、その殆んどが疎開したはずです。疎開するにも、金がかかりよったから、よほど金がない者、どうせどこ行つても同じだからとあきらめていた者などが、島には残つていたようです。

なにしろ、上陸前から、平安座はアメリカ軍の陣地になるぞという噂が流れていましたから。実際、伊計、宮城島はアメリカ軍の陣地になりましたから。浜比嘉島が一番安全でした。津堅島が、一番危険でした。日本軍の陣地がありましたから。だから、四、五世帯が残つて、その殆んどは、真先に各地に避難していました。

平安座島は、海外移民が非常にさかんでした。それで、島には英語やスペイン語を話せる人がかなりいました。なかでも「川前」という人は、非常に英語が達者で、アメリカ軍の通訳として大活躍でした。

この人は、師範学校を卒業してから、両親のいるハワイへ移住していましたが、その後、島へ帰ってきておりました。島では、村の消防団長、防衛隊長などをして、あとの人の指示で動いているようなものでした。いわば、平安座島の守備隊長みたいな役割をしていた人です。だからみんなが疎開しても、重要人物だから区長や村長と一緒に、島に残つておりました。

山中で馬を屠殺

最初のうちには、毎日のように馬を山の中で捕まえて殺して食べました。中、南部の民家の馬や牛が、戦火に追われてだいぶ山原の山の中へ逃げ込んでいたのです。避難先是、女、子供、年寄りが多くて、私が若い方でしたから、ずいぶんたよりにされました。馬を殺すのは四人一組になって、一頭ずつ捕えてきては殺して、みんなで食べました。馬は一度に、二、三頭も捕えてつないでいたり、また、一頭でも一日でもつないでおくと、物すごく暴れて、殺すことはできなくなります。

私は、久志の山奥に、大きな避難小屋を作り、二〇名位入っておりました。そして、いろいろな道具を持っておりました。

クワは、命より宝だったが、そのクワ（ハーゲエー）やカマなど

持つており、夜になると八時頃、夕ごはんを終えてからクワとカマスをかついで、他人の畑にイモを盗みにでかけ、畠は小屋で、寝ております。

私がアメリカ兵に、初め捕まつたのは、ある日、兄と自分の息子と三人で、真昼、散歩がてら、久志の先の浜においてある自分のマーラン船を行こうとして、山をおり始めたところ、突然、目の前に数名のアメリカ兵が、銃をかまえて飛び出してきた。肝をつぶして、さっと手を上げ、兄と息子にも手をあげるように指示しました。私は、軍隊で訓練してあつたので、とっさに、手をあげたが、アメリカ兵は、その動作で、民間人か軍人か見分けがつきよつたらしい。

私の兄は、カナダ帰りで、英語は一応話せたので、事情を説明したら、そのまま、アメリカ軍の陣地に連行され、隊長にも会わされました。そこでは、大変に待遇がよくて、びっくりしました。我々おとなは、ヒゲは伸び放題でしたので、安全カミソリ、石けんをはじめ、食糧品を持てない位沢山もらいました。また三人とも、ボロボロの着物を、アメリカ兵の新品の服に着がえさせてくれて、帰えされました。兄は、通訳として一週間程アメリカ軍と一緒にいましたが、言葉がうまく行かなかったのか、その後帰えされました。私は、アメリカ兵に見つかった時は、非常に恐怖を感じたので、それ以後、昼間に山をおりることはなく、小屋にじつとしていました。

米兵と遭遇

私がアメリカ兵に、夜間にイモを掘

つてきたらよいのにと話したこと覚えていました。

アメリカ兵を見つからずから一ヶ月程たつと、アメリカ兵は、どうもしないといううわさが、山の中にも伝わってきたので、避難民は、次第に、山をおり始めました。そして元の住居で生活するようになりました。そういうする内に、我々は、アメリカ兵にも慣れていました。しかし、その作業は一週間位しかありませんでした。この仕事の話は、私の兄が持つていて「食糧をくれるから行こう」というと各地からきてる避難民のなかから、たちまち一〇〇名位も集まり、たいした仕事がなくとも、沢山の食糧品やタバコをくれました。しかし、その作業は一週間位しかありませんでした。この話は、我々が島へ引き揚げる直前位のことでした。

米軍の陣地構築に協力

さらに、彼等の作業を手伝つて、食糧をもらつたりするようになりました。

アメリカ軍は、久志間に、ほとんど陸続きに近い小島に陣地を構築しており、そこで散兵壕を作るための砂袋に砂をつめこんだり、戦車の通つた後の道の修理作業がありました。

その仕事の話は、私の兄が持つていて「食糧をくれるから行こう」というと各地からきてる避難民のなかから、たちまち一〇〇名位も集まり、たいした仕事がなくとも、沢山の食糧品やタバコをくれました。しかし、その作業は一週間位しかありませんでした。この話は、我々が島へ引き揚げる直前位のことでした。

そしてアメリカ軍の平安座占領とともに捕虜にされたが、言葉が達者だから、すぐにアメリカ軍の通訳として働いたようです。村長は新垣金造という人でしたが、あの人は無数にある壕の中を逃げ回つて、なかなか捕まらなかつたそうですが、その壕生活は、大変だったそうです。

私は、この川前さんが、通訳として金武にきてる時に、平安座にはもう帰えれるからしばらく待つて下さいといわれて、帰える決心をしたのです。待つていて下さいと云われたが、食糧が失くなつてないので、夜間を利用してサバニで引き揚げたのでした。

最初のうちには、食糧は豊富にありましたけれども、次第に欠乏しつづけたのです。

アメリカ軍は、付さえれば日本軍よりはるかに人情があつて良かつたです。なぜ私がそういうのかというと、妻が妊娠していて疎開先の宜野座で五番目の子供を生んだ時、アメリカ兵が八方手をつくして医者を捜して連れてきていたのです。あの時は、本当にありがたいなあと思いました。

五女が生まれて、三日目にサバニ（くり舟）で、平安座に引き揚げたのです。赤児はどうもなかつたです。

私は、在郷軍人でもあり、支那事変で中國大陸で、日本軍隊のやつてきたことは、すべてみておりましたから、アメリカ軍に最初捕まつた時、非常に親切にしてもらつたので、アメリカ兵は、日本軍とちがつて人情にあつたなあと感じました。しかし、軍属の者は、田井等の捕虜収容所に連れて行かれたので、私は、一度つかまつてから帰えされた後は一ヶ月近くも、屋は山を降りなかつたのです。その時も、私の兄には、「彼は、軍隊で訓練を受けていたはずだ」と云つていたそつたが、山の中で、四人の子供と、妊娠している妻が、待つてゐるから帰えしてくれと頼んだら、解放してくれましただけではなく、先程話したとおり、沢山の食糧品を持たせてくれたのです。

大量の米を持って避難

私は、仕事の都合上、山原に避難するのは一番最後となりました。島はガラアキ（空っぽ）同様になつていきました。空襲のあい間

いたから、戦争に負けて、本当によかつたと思いました。

しかしながら、現在の日本は、経済力は世界でも二、三位でも、軍事力がないから、もっと力をつけて、國力を増やすなければならない。戦前の日本は「ヤマトウ一方」といつて、一方的な政策を押しつけるやりかたで、大変だった。現在の世の中で、自衛隊でも戦前の日本軍のような軍国主義だったら、絶対に反対だが、今はそんなことはできないはずだ。戦前の日本軍みたいだつたら、すでに同士討ち、つまり内戦が起きているはずだ。今までに内戦が起きていないのだから今の自衛隊はいいのだろう。

長参謀長の車を運転

平安座島 山 城 正 繁 (三三歳)

戦争直前の島の生活

戦前の平安座島は、人口約三千人近くで、男性の多くは運送業、漁業に従事していました。若いになると、南方に漁業出稼ぎに行つておりました。それはフィリピン、シンガポールなどででした。

平安座の男性は、農業といふものを全然知らなかつたです。戦後、キビ作りが平安座でも一九六一年頃から始まり、これは金になるなあと思うようになり、男性でも農業をやる人が出てきたが、それまでは農業を知らなかつたし、それは女がするもんだとバカにする風潮がありました。

運送業は当時マーラン船（山原船）が、今のトラックのような役

米軍陣地

アメリカ軍の陣地が、すぐ目の前にあつたから、農作業は、すべて夜中にやりました。

アメリカ軍は、沖縄上陸後まもなく、許田から松田を通つて山越えして、すぐに久志間に陣地を作つたのです。何千もの兵士がいて、高射砲、大砲などをすえつけて、立派な陣地でした。なにしろ、満潮の時は、周囲は水で、潮が引くと、自動車でもその陣地に通れるようになつてゐたから。しかし、その陣地から実際に砲弾を発射するはみたことがなかつた。軍用犬も数百匹いました。アメリカ軍の親切さは、本当になんともいえないなあとthoughtでした。

支那で、日本軍のやつてきたことは本当にきたないなあとthoughtです。また、牛や大島材、砂糖樽に使う「くり板材」なども、奄美から泡瀬に運搬しておりました。このマーラン船は昭和八、九年頃には、百隻余りもありました。旧正二日の「初おこし」には、「満艦飾」でとてもきれかったです。旧の七月、正月には必ず全隻帰えてきました。

ところが、このようなマーラン船（山原船）も、昭和十五、六年頃には、半分ぐらいに減つていました。

徵兵忌避

というのは、戦争が近づくにつれて、青年達は、徵兵や徵用でかりだされていくので、平安座の人たちは、かなり召集のがれのため、南方に漁業移民として沢山出ていました。それでマーランの乗り手が、いなくなつたので、半数位に減つてしまつたのです。

当時の兵事主任をしていた私の知る範囲でいつても、海外移民の大体は、ここにては戦争にとられるからといって、特に親の方が、子供かわいきで移民をすめていたようです。移民すれば、徵兵延期になりよつたのですから。私は、一種の徵兵忌避とみていたのですが、それは法に触れるわけではありませんでしたから、私からとやかくいつた覚えはありません。

をぬつて、山原船に二〇〇袋もの米を積み込んで、久志の方に避難したのです、とても自分たちだけで食べることはできぬ程の多量の米だったので、避難先の村の人たちにも分け与えました。一世帯あたり三袋ずつあげましたが、なお平安座に引き揚げる時も残つておりました。といつても、避難民も増え畑のものは失くなる一方だから、この先食糧がなくなつてしまつたらどうしようと考えて、保存のきくものはなるべく残して、大変な節約をして生活しました。

私は避難先の村では、一番若い方でしたから、毎日田んぼに出て、スキで土を掘りおこす力仕事を私がやりますと、若い女や年寄り連中が、そこに稻を植え付けするということをやつておりました。力仕事を私たちがやつたので、私たちがきていやがられるとはなかつた。

こうして、平安座名物のマーラン船も、戦争のために、戦後五、六隻しか残りませんでした。マーランは戦時中物資の輸送にあつたので、米軍にねらわれたのです。

海外出稼移民などの送金もあって、平安座は、戦前、かなり裕福な生活をしておりましたよ。

飛行場建設の徴用

ところが、昭和十八年頃から総動員令、徴用令がかかるつて、若い者から年寄りまで男女を問わず、かりだされるようになりました。

特に昭和十九年頃に、津堅島に日本軍の飛行場を作るために、国場組の國場幸太郎氏が与那城村役場にやってきて、新垣金造村長に、徴用による労務者確保を依頼しておりました。嘉手納飛行場建設にもかなりの徴用が行なわれました。そこでは、米一粒にイモ一斤混ぜるといわれる程、食物はわずかしか与えなくて、大変きつかったです。

こうして、戦争が緊迫してくるにつれて、これまでの生活が狂い始めてしまいました。

兵事主任

昭和十八年に、私は与那城村の兵事主任になりました。当時の兵事主任というのは、いばつたもんでした。仕事の内容は、徴兵検査から召集までで、この仕事だけは、本当にきびしい規則にしばられており、非常に忙がしかったです。

一週間に一度は、必ずしも、中頭郡などといふ各郡ごとの兵事主任

それがおわると、今度は憲兵が、その性病患者を、なぐりつけるのです。これも実に氣の毒でした。ですから、私は、徴兵検査が行なわれる数か月も前から、各部落を回わって、「性病患者だけは出してくれるな。もしそれにかかる場合は、検査までにはすぐなおしておくように」とふれまわつて歩きました。

一度師範学校出の青年が、性病患者だということになつていたが

「自分には身に覚えのないことだ。何かの間違いだろう」といつて、飛行兵に志願したら合格して、性病のしの赤印が、いつのまにか消されているということがありました。

民間人の訓練

青年、婦人、生徒に対する竹ヤリなどの訓練は、下士官だった退役軍人が、教練指導員としてやっておりました。それは青年訓練所と呼んで各学校で行っておりました。与那城村は、伊計、宮城、平安座島という離島をかかえていたので、訓練所も沢山あつたわけです。避難壕掘りの指示は、私どもがやるのではなく、各消防団の方でやつておりました。

平安座島の方では、川前喜達というハワイ帰えりのかたが、このかたはハワイで相当の財を築いて帰つてきましたが、この人が、消防団長をして、団員が三〇名位おりました。この人は、翼賛会の少年組織である翼賛少年団の団長も兼任しておりましたが、丘の上の一本松のそばに、軍の直接の指示ではなかつたが、自發的に監視

会議がもたれました。

県庁の中部事務所が、普天間にできておりました。そこでは、徴兵令の改正などにどう対処するかなどが話されました。これまでの徴兵令では、南洋、フィリピン、シンガポールなど内南洋に出稼ぎに行っている人たちは、徴兵令が延期になつておりました。それが改正になって、現地でも徴兵検査を受けるようになりました。

それに伴う事務などの仕事、連隊司令部にその数を届出たりしました。また「観闘点呼」—帰郷兵の一か年の訓練などの仕事なども毎年ありました。

兵事主任は、司令部に行きますと、「えらい人に「在郷軍人の士気を鼓舞するのは、きみらにあるんだ」「兵事主任には、恩給も与える」などと、非常におだてられ、かわいがられたもんです。

「観闘点呼」は、与那城村の場合、本島と離島平安座の二か所で、一〇〇名近い退役軍人を対象に訓練しましたが、その場合、憲兵が二人もきました。

徴兵検査

兵事主任の仕事で一番つらいことは、徴兵検査でした。その頃も沖縄には淋病、梅毒患者がおりまして、徴兵検査の際、性病にかかっていることが判明すると、淋病の場合は「淋病」とかいたフダを、ひもを通して、それをその本人の首にぶらさげて、みんなの面前に立たすのです。そこには、司令官、徴兵官がいてその側に立たすのですが、実に恥かしい次第でした。

所、見張り小屋をこしらえて、各団員が交代で見張りに立つていきました。また、山の手の方に避難壕を掘つたり、夜間に、竹ヤリ訓練や消火訓練などをやっておりました。

翼賛少年団には、児童生徒全員が加入しております、夜間にも、竹ヤリ訓練などをさせられ、士気を鼓舞されておりました。

長参謀長の運転手

私は、十・十空襲の六ヶ月前から、今の那覇市の松山町にあつた連隊司令部に勤務するようになりました。そこは、給料も良かつたしそがよいから行きなさいと云われて行きました。私は、自動車の運転免許証を持つていたので、沖縄派遣部隊の本隊である一六一六部隊の情報課で長参謀長の車の運転をすることになりました。

十・十空襲のあつた二、三ヶ月前から、台湾から部隊長がやってきて、その部隊の兵器検査を行つておりました。

十・十空襲当日は、台湾からえらい人がみえて、第一高女の講堂で、午前十時から講演会がある予定でした。それで私も、その日は早出するようにといふ命令が出ていたのです。

出勤の途中、連隊司令部の附近で大きな大砲の音がして、子供をだいているお母さんたちが、外に出て騒いでいました。

私は、その騒ぎを制止して、「今部隊で兵器検査をしているから、その音ですよ」と云ながら、司令部へ入つていつたのです。

すると、なんとそれは空襲だときかれて肝をつぶしましたよ。それでも仕事だから、私は、車を出して、市長官舎に住んでいた長参謀長を司令部にお連れしました。

十・十空襲では、別に負傷することもなかったのですが、相当家

は焼かれ、死傷者が出来ましたので、ここにいてはそのうちやられて

しまうと思い、思い切って転属願いを出しました。転属願い先は、

嘉手納の飛行部隊でした。

嘉手納へ転属

それでは、球部隊の航空修理所に勤務したらどうかと云われ、嘉手納の西側の比嘉部落の向いにある修理所で事務の仕事をするようになります。

私が、嘉手納を希望したのは、戦争が激しくなれば、国頭に近いから、危なくなつたらそこへ逃げればなんとか生き延びれるのではないかと思い希望したのです。

そこでは、寮に寝泊まりしました。その寮には、北海道出身の小倉中尉という課長をはじめ、現役兵らがおりましたが、彼らは、毎晩、酒を飲んで「ここは、これ（女の意味）がいるからだのしみだが、このままでは危ないなあ」と話しているのを聞いて、ここにいたら、本当に死ぬかも知れないと感じていました。

私の同僚には、東江という伊江島出身の写真屋、仲村渠という写真屋、この人は現在でも那覇で写真館を経営しているらしいが、この人らは、航空写真を撮りにきていました。その他に現在画家の大嶺信一さんも一緒に、十五名位いました。

上陸空襲

しかし空襲が激しくなって、我々の部隊は首里に引き揚げるよう

命令が出ました。

それで、昭和二十年三月三十一日朝、そこを引き揚げていく途中、空襲がひどくなつたので屋良部落に大きな自然壕があつたので、そこで、一時待避して、夜間行動をとることにしました。昼頃には、そこへ着いていました。

我々が、壕に入っている間、写真班の東江さんと、若い青年が、立哨にたちました。彼らが立っているすぐそばに、ガソリンかんがふたつありました。それに突如、直撃弾が当つて、あつというまにふたりは火だるまになり、若い青年は、すぐに倒れてしまい、東江さんは、火だるまになりながら、我々のいる壕の方へかけつけてきたが、壕の入口で、火だるまになりながら、三分程立ちつくしてばかりと倒れてしまいました。実に恐ろしい出来ごとでした。

まだ、かすかに息がありましたので、私と仲村渠さん、大嶺信一さんに、もう一人青年と下士官五名で、美里村の「クールー山」に病院があるということでしたので、そこへ運んでいましたが、途中で息を引きとってしまいました。

すると、下士官は、「自分は、どうしてもすぐに首里の本隊に帰らなければならぬから、あなたがたは、彼の始末をしてからあとできなさい」といつて、我々と別れてしまいました。残った我々の手で、彼を埋葬して、我々は首里へ行つたら危ないから、国頭の方へ逃げようということになって、そこへ逃げのびたのだが、翌日は、アメリカ軍の沖縄上陸の日だったのです。

上陸の日の迫撃戦

北谷の浜に上陸したアメリカ兵が、屋良飛行場めざして、突き進んでくるのがみえました。

我々は、「クールー山」の岡の西側にいたから、広々とした飛行場には、さえぎるものは何ひとつなく、まるみえでした。飛行場にかけあがつてくるアメリカ兵めがけて、日本軍の前線部隊が、至近距離から迎え撃つて、アメリカ兵は、バタバタと倒れていました。

アメリカ軍が上陸したその日に、迫撃戦をまのあたりにみて、ついにアメリカ軍が上陸したから、この辺にいたら殺されると思い、しばらく、山の中に身をひそめて、夜を待ち国頭めざして、四人で逃げていきました。

国頭へ避難

国頭でも大変でした。四人で山の中を三日三晩歩き通したことがありましたが、各地からの避難民で、老若男女沢山の人が、ウロウロしていました。

一度は、子供、年寄りと一緒に步いたことがあります。彼らは、足が遅かったが、気の毒になつていろいろ力づけながら歩きました。子供が歩けなくなつたのを、私がおんぶして、小さなガケなどをよじのぼつたこともあります。国頭山中では、いろいろ悲しいできごとがありました。

羽地の「ワンドウ山」の附近には小川が流れていて（どこでもそうだったと思うが）、その小川に沿つて人びとは、避難小屋を作り、四月頃から五月頃までは、それぞれの家族はみんな一緒に生活

米兵の集団強姦事件

一度、アメリカ兵に山の中で、バッタリ会いましたが、その時おきたできごとは、他人には、申し上げられないことです。

我々四人と日本軍の少尉、それに田んぼの主である十八歳の娘さん五人で、山の中の百坪ぐらいの田んぼで、稻をもぎとつていて、突然、五人のアメリカ兵が現われました。なにしろ、山の中の田んぼですから、見通しがきかず、田んぼに入る道がカーブになつていて、英語でなにやらしゃべる声がきこえたかと思うと、ふりむいたらもう目の前にあらわれていましたから、逃げるいとまもありませんでした。

その後のできごとは、それはもう大変でした。私らそんな光景

を、みたこともないこともありませんでしたから。

それから、二、三日後、田んぼで稻をもぎとっていると、娘の父親がきていたので、「娘さんは、どうしているのか」と我々の仲間がたずねたら、「二、三日前から、風邪ひいて寝ている」と話しておりました。

このアメリカ兵どもは、その後、山手の方へあがっていきましたが、避難小屋に火をつけてもやしてありました。こいつらは、小屋を見つけたらすぐにもやしてしまうのが常でした。

敗残兵の生活

もし、山にこもっている日本兵が、アメリカ兵に抵抗したら、すぐにその山の一帯は、山火事になります。彼等はすぐに火をつけるのです。

日本兵にも、あいましたが、我々の出会った兵士は、そのほとんどが、少々の金を持っていて、それで、もみを買ったりしているようでした。

そして、金がなくなったら、非常に頼みこんで、住民から食べ物をもらったりしているようでしたが、我々のこもっていた山では、そのような話はきませんでした。

ほとんどの人が、山をおりた後も、まだ村の近くの避難小屋に、二人の女性が住んでいました。村はごくわくて、ここに住んでいるということでした。

その二人が、我々の小屋にいろいろな食糧を持ってくれたり

しました。その中にチーズが混っていて、我々は、誰もそれを知らないものだから、みそ汁に入れて、ダシをとろうとしたが、いくら炊いても、ダシがないで往生しました。その後その女性に食べかたを教えてもらい、大笑いました。

我々のいた山は、羽地村田井等の山奥で、相当奥深いところでしたが、こんなところまで、よくアメリカ兵がやってくるもんだと感心しました。

家族の消息

だが、どんな山奥でも、避難民が歩き回っていたから、道ができておりましたので、よく遊びがてら、山の尾根づたいに、平安座島が見えるところまで行きました。それは五月の中頃だったと思いまが、その山中で、偶然、見知らぬ人から、私の家族の消息がわかりました。みんな元気でいることがわかり安心しました。

四月頃は、上空をトンボ(ていさつ機)が旋回して、急上昇していくと、すぐに必ずそこへ砲弾が飛んできました。旋回して急にエンジンを止めて、ストンと近くまでおりてきて、また急上昇することがよくありました。あれは不気味でした。

五月すぎると、飛行機は飛んでいて、何事もなかったです。私の家族は、妻と子供がひとりいました。

疎開命令がきた時、母と小さい弟と妹が国頭の安田に避難しました。しかし焼夷弾などで、家が焼けだらいくらいで、父と妹の三名は、平安座島に残つておりました。

避難先は、指定地に行つたのですが、受け入れ態勢は、不十分だ

ったそうです。指定地には、どことその村の人たちがくるからといふ通知は、届いていたのですが、例えば、米の配給カードを避難民は持っていても、あるべきはずのが、ないという状態だったようです。

特に首里、那覇の人は、農作業をやつたこともない人が多く、また山道も歩きなれていなかつたので、大変苦労したようです。

終戦の翌日投降

我々は、軍人ではないが、軍属だったので、もし捕虜になつたら殺されてしまうと思い山をおりることができませんでした。

しかし、山中でよく出会つた避難民が、ひとり去り、ふたり去りして、この小屋いっても、あの小屋いっても、次第に空屋になつていき、我々は、小屋から小屋を転々と泊まり歩いていく内に、次第に心細くなつてきました。

それで、四人、別々になって、思い切つて山をおりました。するべく、その日が、なんと八月十六日で終戦の翌日だったのです。

おかげで、アメリカ兵には、非常にしばられました。「終戦がわかつたから、山をおりたんだろう。おまえは、軍人にちがいない」といわれましたが、その時の通訳は、ハワイ帰えりのかわいい親切な娘さんでした。彼女が私を非常にかばってくれたので、助かりました。私は、辺野古におじ夫婦が住んでいたので、収容所は、辺野古を希望してそこへ行きました。

当時は、部落全体が、収容所になつていたので、勝手に移動することはできませんでした。

平安座島での生活

私は、辺野古での生活が始まると偶然に東風平で兵事主任をしていた人や、昭和九年頃勤めていた運送会社の古い同僚に会い、彼らの紹介で、久志の市役所へ行き、そこで社会事業課の運転手に採用されました。そこで仕事は、辺野古崎(大浦崎ともいいます)から、物資をトラックで運搬する仕事でした。そこでは、数か月働いてその年の十一月の初め頃に平安座島へ帰りました。

それでも、まだ六千人ほど住んでいて、空屋ひとつなく、掘立て小屋にも人が住んでいました。さらに、他の地域から収容された人びとが、平安座を離れていった後は、アメリカ軍の使役もなくなりました。その後通訳をつとめていた川前さんが、アメリカ軍にわたりをつけて、平安座のかなりの住民が、川崎のアメリカ軍部隊の作業に通うようになりました。

「ラック」という水陸両用車で、平安座から天願港に渡り、そこから川崎の部隊へとアメリカ軍と通いました。それで、平安座には、修理工などの技術屋が、沢山でました。

また、川前さんが、Q・Mの沖縄班長になり、戦前の商業高校の後にキャンプを作つて、平安座の人たちを数百名送りこんでいましたから、今でもQ・Mには、平安座出身が多いです。

平安座の人たちは、この川前さんのおかげで、多くの人が、仕事にありつけて、大助かりでした。

それで、一九五〇年前後には、新垣金造さんの次に与那城村長になりました。その後また、Q・Mについています。

私は、その後しばらく与那原に住んで材木商を営むようになりました。平安座に残っていた四、五隻のマーラン船（山原船）を借り切って、國頭から丸太を運び、南部の各学校建築用として売りさばき、かなり貯金もできました頃、新垣村長に呼ばれて、庶務課長を勤めました。その頃の給料が、月に一〇〇円（B円）そこらでしたから、勤める人がいなかつたです。新垣さんが村長をやめた時、私もすぐにやめました。それから、事業をやったり、いろいろなことをやりました。

伊計島のことについて私がきたところでは、伊計島は戦争中日本兵の本土へ脱出する中継地だったそうです。

伊計は各部隊の連絡所になっていたそうで、またクリ舟などもちゃんと準備するようになつていていたそうです。

日本軍に抗議

宮城島 首里牛善（四六歳）

農産物の供出係

私は、当時、宮城島上原部落の、農産物を軍へ供出する係をしていました。その仕事は、書記と二人でやっておりました。宮城島は

みえても歓迎しにこなかつたから、私を軍法会議にかける、といつて脅かしました。私は「軍法会議にかけたいならかける。私は、実際に、盗まれた場所も知っているんだ。住民には盗みをするのはいない。あなたがたがとつたことは間違いないのだ」とい返しました。

この伍長は、その後私の家に、二、三回もやってきては、「どなつておりましたので、「やれるならやりなさい」（軍法会議にかけてみろ）。私はこれまで凶民と一緒に軍へどこまでも協力して、供出までしてきたのにそれを横から盗んでいくとは、これは日本軍人としてその資格がないのだ。私は、村役場にも、あなたがたの部隊にも供出しているのに、まだたりないのか。あなたがたは、一般民衆の命を守るために、ここへ駐屯しているのだが、今はあなたがたは遊んでいて、農民が働いて農作物を供出しているのだ。それでも、自分らが盗つても、とつていよいよいるのは通らない。一般民衆はめくらではなくて、ちゃんと目を持っているのだ。何名がとりよつたというのもはつきりしているのだから、あなたがたが、いくらとつていよいよいるのだから、あなたがたが、いくつたら、もうその後は、この鹿児島出身の伍長はこなくなつてこのことはうやむやになつてしましました。

実際、この農産物の供出には苦労しました。

その当時、農会組合というのがあって、私はその組合理事の一人でしたが、供出物の運搬は理事が交代でやることになつていました。しかし、殆んど私が運びました。一週間の間に組合に集めた農産物を、納期がくれば雨が降ろうが、風が吹こうがクリ舟で役場へ運び

四か部落から成つており、それぞれ部落毎に、二人ずつ供出係を置いていました。

私が徴用の通知がきて、そなると供出がとどこおるので、すぐ徴用取消しなつたので、私は徴用には一度もつておりません。私は、永年上原部落の区長をしておりましたので、供出係は適当だったのでしょう。

供出は各戸毎に割当て制でした。その当時は供出をいやがるという気分は、住民の間にはなかつたようです。みんなしかたがないものとしてうけとめっていました。

一週間に一度ぐらいの割合で、集まつた農産物を屋慶名の村役場の方に、船で運搬しました。それも私の仕事でした。

日本軍に抗議

ある晩、供出用にとつておいた大根を、兵隊に盗まれたと、私にいつてきた農民がありました。私は、早速「これまで軍のいうとおりに、きちんと農産物を供出してきたのに、その上農民の畠から、作物を盗むとは何事だ」と駐屯部隊におしかけて、軍に抗議した。「そんなことは、誰もやつていらない」と抗議をうけつけないので、「それでは、盗まれたといつている本人を連れてくる」といつて、当入を軍へ連れていくと、本人は度胸がなく、軍をこわがつて、だまつてしましました。私の前では、軍の悪さを告げても、軍の前に出すると、軍のごきげんをとるようなことをいうのだから、私が軍をどろぼう呼ばわりすることになつてしましました。

部隊の伍長は、私が軍をどろぼう呼ばわりしたうえ、大尉が島に

ました。しかも、運び貢なんて出るはずもありませんでした。

十・十空襲の時

昭和十九年の十・十空襲の時、宮城島にいる日本軍の駐屯部隊はそれが敵機だということはわからなかつたのか、住民にはなんの連絡もありませんでした。

ちょうど、その時、警防團長が、本島へ渡ろうとしていたが、異常な状態なので、これは、敵機の来襲にちがいないと判断して、途中で引返して、住民に空襲だから避難しないと呼びかけたのです。それから、住民は避難はじめたのです。

彼は、村で銃剣術を指導している退役軍人だったから、よく判つたのでしょうか。

避難中に、もう飛行機は、島の上空に達しており、中部の各飛行場などを空襲しての帰えりだつたらしく、弾をまだかかえている飛行機は、部落にもボンボン落としてしまつた。それでその時、だいぶ家は焼かれてしましました。

十・十空襲後、民家や学校に駐屯していた部隊は引き揚げて、島には友軍は一人もいなくなりました。

日本軍の擬装大砲

友軍は、島の高台のあちらこちらに、松の木を切り倒して、擬装大砲を設置してありましたので、「こんなもんをおいていかれたら部落が爆撃され、村民が殺されてしまうだけだ」ということになり、警防團の人たちで、取りこわしてしまいました。

ですから、宮城島には、日本軍の陣地はなくなつたわけで、アメリカ軍の艦砲射撃を受けることはありませんでした。

しかし、津堅島には、日本軍の強固な陣地がありましたので、むこうは相当たかれました。

我々は、闇夜にはよく丘に登つて、アメリカ軍の艦砲射撃をみにいったもんです。

夜間の農作業

戦争が近づくにつれて、空襲がひんぱんに行なわれるようになり住民は、自分達の命を守るだけで精一杯になり、供出どころではなくなりました。

そして、日中は避難壕にひそんで、夜になると食糧さがしに出でいき、イモ掘りや食へ物を炊いて、また壕へ運び入れるというくりかえしでした。イモ掘りは、闇夜にはできませんから、月の夜に、十日分位も掘つて貯えておくということをしなければいけませんでした。

でも空襲というのは、爆弾は落とされ、機銃はバラまかれるわけですから、壕の中にいても、いつもヒヤヒヤしていなければなりませんでしたから、その時の苦しみは、やはり言葉ではいいあらわせないものがありました。

米軍の上陸

アメリカ軍が、宮城島に上陸したのは、四月中頃でしたが、それは私の九番目の子供が、生まれて十日ぐらいたった頃でした。

△首里牛善氏の妻の証言△

アメリカ軍が上陸した日、私は九番目の子供をお産して十日目だったのです、アメリカ軍が上陸したのをきいて、どうにでもなれとう気持ちで、おしゃうとさんと一緒に家の中に赤児を抱いてじっとしておりました。

おそらく思いで、裏座の方でじっとしていると、突然、ドヤドヤと足音がしたので、すきまからぞいてみると、アメリカ兵十名が、庭先に入つてきました。先頭の兵士は鉄砲を手にしておりました。家の軒下の方に、日の丸の旗を掲げてありましたので、それを見つけた兵隊が、ひきちぎって破つてしましました。

そして、くつままドカドカとあがりこんできて、私が赤児をだいてかくれているところにも入り込みできました。

しかし、私の様子から、「お産したばかりか」というようなことをいつて、それから、おじいさんがいる部屋に入つてきました。

おじいさんは、あまりのこわさに、ぶるぶるふるえて横になつておりました。アメリカは、それを見おろして何んとかんとかいつてかくれています。

川前さんは、私が、日本軍への供出係をしていたことを知つていたのでしょうか。

「トゥンナハ」の浜まで行きますと、アメリカ兵が、すでに住民四、五〇人を取り囲むようにして立っていました。

そこで、アメリカ軍は、私に「軍に協力するか、しないか」と聞いていました。アメリカ軍が、こわいからしかたなく、「協力しますよ」と答えました。「それでは、まず、卵を一日になん個か軍に供出してくれ」といいましたので私は、「それは、区長がしかわからないから、区長に相談してくれ」といって逃げました。こっちには、養鶏場があるわけではなく、ニワトリは、放し飼いにして卵を産ませていたのだから、こんな約束をしたらどうなるかわからんと思いました。

その後、住民はアメリカ兵が、何もしないということがわかり、特別なできごともなく、本島では激しい戦闘が、くりひろげられていました。島ではのんびりした生活が続いておりました。

不自由な収容所生活

しかし、上陸後、数週間たつたある日、突然平安座島への疎開命令が出されてから、宮城島住民にとつては、これまでにない苦しい生活が始まりました。

これまで、アメリカ軍が上陸後も、島内では、全く自由の身であつたが、平安座では行動が制限された収容所生活であった。そこでは、せまいところへ、伊計、宮城島など沢山の人びとが押し込められたから、食糧は不足して、これまでとは比べられないぐらいの

アメリカ軍は島の北側の「トゥンナハ」の浜に上陸して、平安座島の川前喜達さんを通訳を使って、マイクで「アメリカ軍の云うことときけば、殺さないから、壕の中から出でくるように」と触れ回わつておりました。

アメリカ軍が、島へ上陸したという知らせで、若い連中は、みんな壕に逃げ込んで、家には、病人、年寄り、お産したばかりの人などが残つておりました。

米軍が協力要請

アメリカ軍が上陸して、壕から出でくるように呼びかけても誰も出ていかなかつたようです。私も、父に、「赤児と娘は私がみていいから、子供たちを連れていてげる」といわれて、生まれたばかりの子供と妻と父を残して、壕にひそんでいたのです。

アメリカ兵は、住民が出てこないので「トゥンナハ」の浜に引き揚げておりました。

それで、私は家に様子をみに帰えつていると、川前通訳が、私を捜して、訪ねてきておりました。川前さんは「アメリカ兵は、別にどうもしないからは非きてくれ」といつて私を「トゥンナハ」まで連れて行きました。

不自由な生活でした。

それで、軍に頼んで、島へ食糧とりに行くことを許してもらつたが、それは、数が制限されていましたから、こっそり島へ渡たり、食糧をとつてくるものもかなりいました。

アメリカ軍は、住民を追い出してからは、島の高台のまわりに、部隊を配置して、見張り所としているようでした。

我々は、部隊の近くのアメリカ軍チリ捨て場に行き、古着や、テントの切れはしなど拾い集めたりしたんです。

島の海岸で、日本軍の飯ごうがみつかつたから、日本兵が、村にかくまわれているはずだということで、家搜しされたことがあります。住民を追い出したのは、そういうことのためだったかも知れません。

横暴な米軍

アメリカ軍は、住民のいない間に、立派なかわら葺きの家を数軒焼き払つてありました。

また、村中のニワトリを盗んで、部隊で一か所に銃つて卵を産ませて食つていました。

馬小屋につないであつた馬は、全部にがしてありました。

失くなつた食糧品

私は、黒砂糖を、一二〇斤詰め砂糖樽を十丁持つておりました。二丁は、平安座へ運び込んで、売るでもなく全部食べてしまひました。後では貴重品になつてだいぶ値が高くなつっていました。残りの

桃原部落の東側の高いところにアメリカ軍の見張り所があつて、カイでこぐ音をききつけたアメリカ兵が、めぐら減法に舟めがけて鉄砲をパーンパーンとうつてきましたので、おどろきました。

それから、非常に遠まわりして、宮城島の東側の「奥の浜」とか、「ダカチナ」とか「アクナ」という浜に、そつと舟をつけて、ひそかに部落へ入り、イモを掘り起し、自分の家からミソや塩を運び出して、アメリカ兵に気づかれないように平安座へ帰りました。こうして飢えをしのいでなんとか生きのびることができました。が、いつも命がけの食糧運搬でした。あの時の苦しみというのは、言葉ではたとえようがありません。

平安座市の誕生

平安座島は、このように収容所になつていましたから、人口が約一万五千人位に増えていました。

その後、アメリカ軍は、平安座地区を市として運営するように云われ、学校に市役所を作りました。そして市会議員も十一名選出されました。私のシマ（上原部落）からは、私ともう一人の二人が立候補して、選挙の結果私が当選しました。

帰島運動

あの時は全くの無報酬でした。それは十か月程続きました。議員になつてからの私の仕事は、先ず島へ帰えり、島の復興を計ることだと考え、英語は話せないから、川前さんを通じて、毎日毎日、アメリカ軍と折衝しました。各部落ごとに議員が選出されていました

八丁は、避難壕にかくしてあつたが、取りに行つた時には、全部だれかにかづばらわれて失くなつていました。

敗残兵等が漂着

戦況がしだいに悪化するにつれて、島尻から、クリ舟や、木切れに乗つて島々にたどりつく防衛隊員や、日本兵が増えてきました。

宮城島出身の兵隊もひとり、たどりついたのを知つています。平安座へたどりついてまた宮城島へ渡つたが、人がいなかつたからといつてまた平安座島へ戻つてきてる日本兵もいました。

このような日本兵を、みんなが可哀相に思つて、平安座の収容所でかくまつていましたが、爆弾穴うめ作業や排水溝作業などをみんなと一緒にやつてゐるところを、アメリカ兵にわかつて引っ張られていきました。

この頃から、こっそり島へ渡る宮城島住民に対して、アメリカ軍はきびしくなり、ある日、若い娘さんが、犠牲になつてしましました。

宮城島出身の兵隊もひとり、たどりついたのを知つています。射殺事件があつた後も、私はクリ舟で、夜中こっそり島へ渡つたろうとしました。

命がけで食糧運搬

しかし私の場合は、子供が九人もいて、しかも年寄りがいるので、どうしても島へ渡つたつて食糧をとつてこなければ、飢えてしまします。射殺事件があつた後も、私はクリ舟で、夜中こっそり島へ渡つたろうとしました。

が、軍と折衝したのは私ひとりだけでした。

私が軍に「島が荒れ放題になつてゐるから、井戸や住居を清掃したり、道路を修理したりするから早く島へ帰えしてくれ」と頼むと、軍は「あなたがたは、島へ帰えつても仕事はないから帰えりなさい」と答え、このよだな押し問答を毎日のようにくり返えしたら、やつと帰島を許可してくれました。

三か部落の議員は、軍となんら折衝しえなかつたのだから、私は自分の出身部落の上原部落の住民から帰えすことにしました。全住民の引き揚げはアメリカ軍の注文で、四、五回に分けて、二か月近くもかかりました。

砲弾でつぶされている家は、食糧とりにきた時すでにわかつていたので、家が残つてゐるのを優先させて、第一陣は、上原部落と宮城部落の十世帯を皮切りに、桃原、池味部落の順に引き揚げてきました。

伊計島の議員が、自分たちも帰えれるようと一緒に交渉してほしいと頼みにきていたが、自分たちでやりなさいととり合わなかつたら、私たちが、島ですつかり落ち着いた頃、引き揚げが実現しました。それで、宮城島の住民が引き揚げてゐる時、伊計島の住民の中には、少しでも伊計島に近い島にいたいという頼みがあつたので、宮城島の村を一緒に清掃するならいいでしょと許して、宮城島にきていた人もいました。

市会議員の肩書は、引き揚げてから二か月位たつて解消しました。それは、前原地区のウッド大佐という部隊長が、私を宮城島四

か部落の地区長に任命した時、平安座市は解消されたと思います。

部落の復興期成会

市会議員として、部落の復興に全力を傾けました。まず、家を失くした人々の、家の建築から手がけました。各班毎に、編成して、カヤを刈らしたり、松の木を切り倒してきて、それらで、簡単な住居を各部落ごとに作らしました。

地区長となつてからは、復興期成会を作り、それもまた推されて会長となり、その時はすでに焼失した住居は、再建してあつたので軍から資材をもらい、診療所の建設にとりかかりました。

しかし、区長制が復活したので、これを機会に、期成会を解散して、各区長に責任をもたせるようにしたら、三ヶ月かかるとも診療所を建てることができないので、各区民にもう一度期成会を復活させて、診療所を完成させるまでやつてくれと頼まれたので、それを完成させてから正式に解散させました。

戦後の生活

私は、終戦当時は、夏はよく漁に出てさかなをとつたりもしていましたけど、父に畑に精出すように強く云われていました。というの

は、私は、戦前イモだけの収入で、一か年の生活費は出できましたから。クリ舟にイモを滿載して、近くは平安座から遠くは辺野古あたりまで売りに行きました。

戦後もやはり、クリ舟でイモ売りにでかけました。金武方面（塩原、豊原など）に行きましたが、そこには、南部方面からきていた

消防訓練の場合は、浜から、砂や海水を、リレー式に運ぶというやりかたでした。五〇歳すぎの婦人までも訓練をうけました。竹やり訓練などは、ちょっととした広っぽで訓練をうけました。そして、指導員が、突然「敵機来襲」と叫ぶと、各自、自分が立っているかたわらに、ところかまわず伏せなければならず、伏せたところがよく牛やニワトリの糞の上であつたりして、大変でした。そしてまた「敵機去った」と叫んだ時には、立上がるという、今から考えると実にバカらしいことを真剣にやらされたものです。

ここでは、女性は、学校を卒業して二十五歳までは処女会、二十歳以上は婦人会、男性はやはり二十五歳までは、青年会、二十五歳以上は同上会（今は成人会）に組織されていました。消防訓練は、更に、ある家に焼い弾が落ちて火事になったと想定して、その家の屋根にまでのぼって、みんなで火を消すまねごとなどしました。そういう訓練は、実際の空襲には、なんの役にも立ちませんでした。

空襲下の生活

空襲は、十・十空襲以後なんべんも来襲しました。私たちの避難壕は、浜の方に作つてあり、一番遠いところにありましたから、空襲だとわかつてから逃げ出しても、壕にかけ込む前に、飛行機が飛んできていたので、荷物を持っていても、土手に身をひそめたり、近くのみぞに飛び込んだりして、壕はほとんど役に立たなかつたのです。それでも炊いたイモやおつゆも持つていましたが、飛行機の爆音が遠のくと、それらを持つて壕に行き、その中で食事をしませんでした。

た避難民が、未だ残つてゐましたので、ひつぱりだこでした。それで、契約して売るぐらいでした。イモ掘りに一日かかるので、一日おきにしか行けませんでしたが、相当寒入りはよかったです。

このような実績があつたので、私の父は、農業に努力するようになつたのでしよう。

父は、口ゲセのように「海アツチャーヤ、ヤードーラダヨ（宮城島では漁業に専念する者は成功しないという意味）」といつていました。それで私は、農業のあいまに海へは行つていました。

しかしそれも一九六七年以來の、ガルフ石油進出に伴う土地闘争が始まつて以来、海にも出るひまがなくなり、クリ舟も売り払つてしましました。また、畑に出る時間も少なくなり、今では、土地の半分しか耕作することができなくなり、だいぶ草ばかりになつてしましました。

宮城島立退き命令

宮城島 根 保 カ ナ（四三歳）

消防訓練

十・十空襲前には、宮城島にも日本軍が十数人いて、高台の方にテントで監視所を設置して、自炊しておりました。ときまた村にもおりてきて、野菜などを売つてくれるようになつたが、私は、可哀相に思つて、それをあげたようになつてました。

消防訓練や竹やり訓練などもよくやらされました。

した。そういう時は、家の中では落着いて食べられなかつたです。当時は、どこの家でも、牛、馬、豚、山羊などを飼つており、豚なんか少くとも二、三頭はいました。私の家でも、小屋一杯山羊がいましたよ。ニワトリも沢山いました。

戦争が始まると、豚や山羊をよく殺して食べました。避難壕に入る回数が多くなるほど、飼料を与えることができなくなるわけですから。

空襲で、焼かれた家もかなりありました。

しかし、死傷者は、空襲でやられた人は一人もおりません。避難壕は、大体、親類が二、三世帯一緒に入れる位の大きさでした。私たちの壕は、「艦砲射撃をうけたら、一番危ないよ、なんでもあるところに掘つたんで、そこからは出なさい」と、私の親兄弟に云われました。

私の母なんかは、あんな壕に入つていて泣いていました。にしろ、アメリカの軍艦は、目の前にずらつと泊まつていたので、私が、壕を出入りするのみえていたはずなんです。

私の夫は、私の兄の呼び寄せ移民として、アルゼンチンに再渡航しました。

その時の私の家族は七人でした。子供は五名いて、その他に戦争が始まる前に一人病気でなくしました。

空襲時代に人が亡くなると大変でした。空襲でやられたのではなく、病気や老衰で亡くなつたのですが、墓に、死者を葬りに行く場合、「ガン」に入れて、それをみんなで扱いで行くのです。墓に行く途中、空襲にあうと、道中にも「ガン」

をほっぽり出して、みんなクモの子を散らすように逃げ出しました。

こうして、空襲のあい間に、葬式も行うのでした。

私のおばあさんの場合は、その日は、飛行機が一機も飛ばず立派な葬式ができました。

しかし、その翌日は、二、三人で、お花とお茶を供えに行く途中、空襲にあり、やつの思いで逃げ帰れました。

生前、付き合いの深かった近所の人たちが、おくやみにいて、大根やおイモなどを炊いて私の家に持ってくるのですが、突然空襲にあり、それらを庭先にばって逃げ去ってしまうというようなこともあります。

十・十空襲前、私の夫の父は、私たちが「避難壕を掘ろうね」と相談すると、怒って「バカヤロウたち、何云っているんだ。ここに戦さがくるというのか。避難壕なんか作る必要はない」といましたが、私は、きかんふりして、私と長男の猛男と亡くなつた三男坊の三人で、壕を掘つていると、おじいさんは「バカヤロウたち仕事をしなさい。いらんことをして。油絵には戦さはこない。ムダなことをして」と非常に怒りよつたです。

私は、子供らが多いから、避難用の食糧を沢山貯えておこうといつて、小麦でハッタイ粉や、また私は、お米を貰つたことがないくらい田んぼがあつたので、精米所で沢山のモミを精米させて、貯めておきました。

おじいさんの徵用

私のおじいさんは、当時六十歳すぎでおりました。家大工や石大

工もできました。

ある日、村役場の人がやってきて「おじいさんの職業はなんですか」とたずねました。

おじいさんが「農業です」と答えると「農業以外に何かできますか」とまたたずねると「石大工ができます」と答えました。すると

「それは、あしたから徵用です」といわれ、すぐに読谷飛行場へ行かされたが、宮城島は嘉手納の飛行場作りの方だといわれたそうです。だがもう日が暮れていたので、読谷喜名の公民館に泊めてもらい、翌日嘉手納へ行き、そこで三日位働かされたら、係の人が「あなたは、お年寄りだからもう帰れりなさい」といわれ、宮城島へ帰えされました。

帰えてきたら、「オイ、一大事だ。早く避難壕からこしらえなさい」といって大騒ぎをしておりました。私が、避難壕を作るといつたら、沖縄に戦争がくるはずがないといつてバカヤロウ呼ばわりしていたのに、中部の状況を見てからは、「大変だ、大変だ」と云いだしたので、私は「おじいさんは、徵用にとられてよかつたね」と大笑いました。

徵用中の爆死

だが、その後、宮城島の桃原、池味部落から徵用にとられた若い娘ふたりが、読谷飛行場で、敵機が飛んできたのでかくれようとしたら、監督が「作業を続ける、どうもないから」とどなつたので、作業を続けていたら爆弾を落とされ、池味の娘さんは、粉々にふつとばされ、桃原の娘さんは、両足に重傷をおつたが、一命をとりと

め、今ではお孫さんもいますよ。その監督は、アメリカ軍のスペイで、日本人を殺そうとしたんだといふわざが、その後、流れていきました。

アメリカ軍は、宮城島の北側の「トゥンナハ」の浜に上陸しました。四月の十日頃だったと思いますが、その近くには、私の娘や息子らが隠れている壕がありました。

米軍の上陸・宣撫工作

アメリカ軍は上陸すると、すぐにそこらの壕から、住民を出して、チューインガムなどをとり出して、食べなさいといって差し出しだが、住民は、それらには、毒が入っているかも知れないと思って受け取らないでいると、毒は入っていないといつて、自分で食べてみせました。

その住民の中には、南米帰えりでスペイン語の話せる私の娘や親類の人たちも混じっていて、彼女らが、チューインガムなどに毒は入っていないはずだから、受取りましょうといつたら、みんなも、お菓子や、タバコを喜んで受け取始めました。

アメリカ軍は上陸する際、平安座の川前というハワイ帰えりの人を通訳にして、壕にかくれている人は住民に危害は加えないからすぐ出てくるようにといわせておりました。その後は、島の人も通訳を使っておりました。なにしろ海外移民がおりの人が、かなりいましたから。

それで、安心してみんな壕から出でていきました。

私も、南米で十年も過してきたので、スペイン語が話せたから、

スペイン語がわかるアメリカ兵がおればいいのにと思いました。

アメリカ兵は、島の高台のまわりのあちらこちらにテント住まいをしておりました。

別に住民に危害を加えるということはありませんでした。

ときたま、民家にやつてきては、タマゴを賣ににきました。「タマゴ、タマゴ、ワン」といつておりました。「卵をひとつくれ」という意味だつたはずです。買うといつてもタバコなどと交換することです。

アメリカ兵が上陸してからは、島の若い娘たちは、身を防ぐために、わざと汚いみなりをしていましたが、よく見れば、若いということは、すぐわかるものでした。

ある日、おばあさんの仕事のために、私の娘や、娘の友だちなどが、法事のそなえものを炊いている時に、アメリカ兵二人が入つてきました。イモをすりつぶした「ウムニー」をシャモジに入れて、「はい、食べなさい」といつて、顔の方へ持つていくと二人とも「オー、ノー」といつて、大げさな身振りで、うしろへひっくりかえりました。

若い娘二人は、トウフを油で揚げていたのですが、それを見つけると、そこへ近づいていつて、二人をジッと見つめていました。長い間、こわくなるほど、ジッと見つめるものだから、すきをみて、上原部落の方へ逃げていき、夜遅くまで、よその家の「クチャ（裏座）」の方で身をひそめていたようです。

アメリカ兵は、別に追いかける様子もなく、娘たちが、若いものだから、こわがってにげたにぎなかつたのです。

私が平安座島に追われたのは旧の四月十五日頃でした。

多分、アメリカ軍上陸後、三、四週間位たつていたはずです。

うちの畠は、みな家の近くにありましたから、イモ掘りに行つて、イモを掘つておりますと、おとがやつてきて「エー姉さん。きょうすぐ平安座へ移動するようになるとのことですよ。野や畠に出ている人もみんな呼んできて、すぐに平安座へ行かなかつたら、アメリカ兵がきて、鉄砲で射り殺すらしいですよ」といわれました。

その時、すでにバケツ一杯のイモを掘つてあつたので、あわてて家に帰えり、家の者をせかして移動の準備を始めました。

平安座には、二、三日いるだけだといわれておりましたが、そこへ行けば、一、二年も故郷へ帰えされないかも知れないと思い、私は、着物も沢山準備して、豆類も持てるだけ持ちました。

長男の猛男には、バーキ（カゴ）一杯のイモを持たして、私は、衣類その他を持っていました。一番下の子は、私の母が連れて、平安座島寄りの桃原部落まで、かなりの距離を歩いてきました。桃原から平安座までは、潮が引いた時のみはかかる、それでも潮にからだ半分つかりながら、下の子は、私の母がおんぶして、荷物は、それ頭にのせて、海を歩いて渡りました。一番下の子は、私の母が連れて、平安座島の後方に渡りましたが、住居が割当てられていました訳ではなく、私たち親子はこれから先、平安座のどこに泊まつたらいいかと途方くれていると、私の母が、遠い親類にあたる人がいるからそこへ訪ねていつてみようといいました。

宮城島退去命令の背景
この突然の退去命令が出された理由については、その頃みんなが話していたことはこうでした。
その頃、与論島の方からクリフで弾薬を運んだり、あるいは、本土へ脱出をはかった日本兵が、島々にたどりついて、その住民にかくまわれることが、よくあつたそうです。それで、宮城島で

もう晩になつておりましたが、そこを訪ねていくと、もうすでに桃原部落の人が四世帯も入つていました。

いくら親類でも、すでに入つている四世帯の人を出でもらわなければ、いかず困りはてていると、その人が「いつそのことひざをつき合わせてでもいいから、一緒に泊まりなさい」とつてくれたのです。

すると桃原の人が、「私たちは、裏の家の人も知つてゐるから、そこへ頼みに行くから、あなたがた入りなさい」とつて出していくことになり、私たち二世帯が、そこへ泊まるようになりました。

ところが、二、三日平安座に移動しておくようにといつた話だったのですが、宮城島へ帰えされたのは、それから半年もたつた後のことがでした。

宮城島住民に対する退去命令はあまりにも突然のことと、みんなびっくりしました。島の人が三人ぐらいために、通訳になつていたので、かれらを通して命令が伝えられたはずです。

宮城島住民に対する退去命令はあまりにも突然のことと、みんなびっくりしました。島の人が三人ぐらいために、通訳になつていたので、かれらを通して命令が伝えられたはずです。

も、急に住民を追い出して、家探しして、かくまわれている日本兵を見つけ出すためであるということでした。

実際に、宮城島にも、伊計島あたりから、泳いだり、木切れにつかまってわたってきた日本兵が、海岸のガマ（ぼら穴）に身をひそめていることがあつたようです。

部落の中で、かくまうといふことはなかつたと思ひます。

平安座島収容所

私たちが、平安座島収容所に収容されてから自由行動はできなくなりました。

しかし、アメリカ軍の許可で、人数は制限されたうえで、小舟で、宮城島へ、食糧とともに帰えすことはありました。

しかし、平安座での食糧是非常に乏しかつたために、アメリカ軍割当でだけで、島へ食糧とりに行つては、とても耐えられず、次第に入びとは、夜間ひそかに、島へ渡たる者が増えていきました。島には、牛、馬、豚、山羊、ニワトリ、米、イモ、ミソ、砂糖など、収容所では、殆んど手に入りにくいものが、沢山あつたわけですから。

敗残兵を隠匿

ある晩、ひとりのおばあさんが、小舟を島へ近づけると、突然ひとりの日本兵があらわれて「おばあさん、助けて下さい。私を民間人として、この舟に乗せて、一緒に連れて行って下さい」と頼み込んだらしい。そのおばあさんは、「可哀相だから、それでは連れて

行きましょう」といつて、実際に、平安座へ連れてきましたよ。

こうして、平安座の民間人収容所には、かなりの日本兵が住民にかくまわれておりました。そのおばあさんは、自分の食事を節約して、自分がかくまっている若い兵隊に、食べ物を分け与えておりました。その兵隊は、どこで手に入れたのか、大島紬に羽二重の帶をしめているか、こうをしていましたが、なるべく人目を避けたいと、ついで、野にも出たがらませんでした。大島紬では、目立つからといって私の着物をこの兵隊さんにあげました。

友軍の兵隊さんは、背が高く、色が白いから、アメリカ兵には、すぐ見分けがつきよつたらしいです。

私の班の班長さんの家にも、日本兵をかくまつてきましたが、隣組で、チリ捨場を掘つて、この兵隊さんもみんなと一緒に穴を掘つていたら、アメリカ兵がやってきて、引っ張つていきました。きっと誰かが、アメリカに父を通報してあつたはずです。

平安座では、収容されている人びとは、みんなアメリカ軍に登録されて、「登録札」（登録カード）を、寝る時以外、作業中でもずっとそれをぶらさげてしなければいけなかつたです。多分、それを持つていないと、日本兵であることがわかりよつとも知れません。

とにかく、みんな引っ張られてしまひました。

宮城島居残り組

宮城島で退去命令がでても、なかにはこつそり居残つた人たちも

う。

私は、娘を連れて繁みから飛び出して、みんなのいるところへ合流しようとしたが、兄姉は、「私こわいから行かない」といつてなおも山の中にかくれようとしたので、「それは、あんたは、そこで殺されたらしいよ」といつて、私たち親娘はおそるおそるみんなのところへ歩いていました。すると兄姉も心細くなつて、また山の中から出てきておりました。

私は、若い娘を連れているので、アメリカ兵がこわくて、しつかり娘の手をにぎりしめて歩いていく途中、松の木の小枝が、落ちておりましたので、それをふたつ拾いました。

私たち、アメリカ兵に顔をみられないようにするため小枝で顔を隠し、私は、通訳のおじさんの後にくつついで、その人の眼のはしをきゅうとにぎりしめて歩いていました。

その日の朝、兄姉が、「大豆もとりに行きましょう」といいましたが、私は「きょうは、自分ひとりだったら、どうなつてもいいけれど、若い娘を連れているから、ミソと塩だけ持ち帰えればいい」と

その人が「さあ、これからみんなトゥンナハへ行くんだ」といつて、家の出入口の方にちゃんと準備しておいてあつたのです。

それから、逃げなくともよかつたのに山へ逃げ込んで危ない目に会つたのでした。

それで、みんなが集合しているところへついた時に、通訳のおじさんに頼み込んで、みそと塩を取つてきてもらいました。

その人が「さあ、これからみんなトゥンナハへ行くんだ」といつて、こわくなつて「そこでみんなを殺すんですか」といましたので、こわくなつて「ここは危ないから、みんな一緒に戦車で、平安座へたずねたら、」と話していたら、突然、若い娘だけを引っ張り出して、小さな丘の方へ引っ立てていきました。

私は、女性ばかりでしたので、こわくなつて、みんな一緒に木の繁みの中へ逃げ込んで様子をみていました。

アメリカ兵三人のうち、一人が上半身、はだかになつて、銃は持つたまま、娘を追いかけ回わしてつかまえては、また歩けと背をついて娘が逃げだすと、また銃を置いて、追いかけ回わしてはつかまるということをくりかえしておりました。二人のアメリカ兵は、丘の上方から、それをじつとみつめしていました。

その娘は、「アヤーヨ、アヤーヨ！（お母さん、お母さん！）」と泣き叫びながら、逃げまわっておりましたので、私は、それをきくと助けてあげたいが私たちみんな女ばかりだからどうにもならないでしよう、と心の中でそういいました。

私たちが、ひそんでいるところからは、見えないところへ追い込んだかと思うと、突然「ズドーン」という鉄砲の音がしたので、娘を強かんするつもりで、あんなに追いかけているものと思っていたら、殺してしまったんだと思ふくなつて、島の東側の海岸近くにある「グスク（城跡）」の方へ逃げて、夕暮れまで、みんな隠れていました。

送りかえすのだ」といいましたので、それをきいて安心しました。

しかし、私の娘の方へ、一人のアメリカ兵が近づいてきて、穴のあく程、ジットみつめっていましたので、今にも山へ連れ込まれはしないかと心臓がとまる思いでしたが、別に何もしませんでした。

それから雨の降りしきる中を「トゥンナハ」の涙まで歩かされ、そこから水陸両用戦車に、二、三〇名も乗つて、平安座の「ハバル」

という浜に着き、おろされましたが、その時は、命が助かつたと思ふ事件があつたのです。

この日、別の場所では、私の従姉と一緒にいた若い娘が射殺されました。

ある娘の虐殺事件

宮城島 喜屋原 カナ（五四歳）

米兵の住民虐殺事件

私も、射殺事件のあつた前日から、近所の同年輩の人たち三、四人と一緒に連れ立つて、大豆をとりにこっそり島へ渡つてきておりました。

そして私はみそや塩や砂糖などを集めて、翌朝、みんな一緒に、畑に出て、豆をとつております。そこに殺された若い娘さんもいたのです。この娘さんは、前日、両親と一緒に連れ立つてきていたのですが、自分は、近所のおばさん達と豆をとつて帰れるから島に残ることだったので、両親は、その日、日帰りで平安座に帰えました。

それから、娘の様子をみにいくと、こめかみをうたれしており、片方のこめかみは、大きな穴があいて、弾が出ていなかつたのか、もう一方のこめかみは大きくふくれあがつてありました。そして大量の血を枕にしてねていました。足は、片足は立てて、もう一方は伸ばしており、眼は乱れていたので、強姦はされていないようでした。

しばらくすると、また娘を殺したアメリカ兵がひとり、戻つてきました。本当に死んでいるかと調べている様子でした。私は、その兵隊が、戻つてくるのを見たので、あわてて、しげみの中にとび込んでくれて、様子をみておりました。

そのアメリカ兵も去つて、もうすっかり日がくれた時に、私は、この娘に、イモや砂糖をちょっと口に入れて、「私は、女ばかりで、仕方がなかつたんだよ、きょうは、もうここで泊まつて頂だいね。明日になれば、男たちにきてもらつてあなたを運ぶからね」とい殘こして、私は、村へ帰りました。そしてまだ島に残っている男たちにそのことを告げたら、夜遅くから、確かめに行き、翌朝、早く死体を娘の親類の家へ運んで、両親が平安座から来るまで、そこへおいでおきました。

両親が来てから、墓へ埋葬しましたが、葬式の時、娘を殺した同僚のアメリカ兵が、通訳も伴いやつてきて、「女性を殺したということだったがこんなに若い娘を殺してしまって……」と、くやみをのべおりました。

こんなこわい目にあつてから、私は各班毎に割当てられたとおりにしか、もう島へは渡たれませんでした。

その後は、平安座一屋慶名間を干潮の時に歩いて渡たり、勝連村の南風原、西原などにイモ掘りに、大ぜいでかけました。帰えりも干潮の時を見はからつて、大急ぎで帰えるのですが、相当の距離

を、大きなバーキ（カゴ）一杯のイモを頭にのせて、潮につかりながら何回もゆきました。今から思うと、夢みたいな話です。

こんなに沢山の人たちと一緒に歩いているのに、アメリカ兵は、若い娘をその中からみつけたと強かんするので、私は、自分と従姉でゆき、私の娘は、絶対に行かせませんでした。いつも、家のすぐじ、洗濯をやらすことにしておりました。

本当にアメリカ兵は無茶でしたよ。ある日、南風原からイモ掘つてきての帰えり男はカマスに、女はバーキ（カゴ）に一杯掘つてきましたイモをかいだり、頭にのせたりして、家路を急いでいると、三人のアメリカ兵が、こんなに大せいの人たちがいるのに、若い娘が、バーキを頭にのせているのを見つけて、いきなり引つ張り出して、竹ヤブに連れ込んで犯そうとしました。その娘は両親にはさまれて歩いていたのです。母親が「これはうちの娘だからはなして下さい」と追いすがろうとすると、アメリカ兵は、鉄砲を母親に向けて近づけようとしませんでした。

ところが、運良く部隊長が、かけつけてくれたので、その娘は助かりました。

んになってきました。

私は女学校に半年位通つたが、情勢が緊迫してきたので、こわくなつて島に帰ることにしました。それは、沖縄が大空襲される直前の九月二十日頃でした。

宮城で十・十空襲を目撃

島では、児童が学校に「たて壕」を掘つており、まだ島に残っている若い人は自分が中心になつて「青年会」を組織して部落の大きな壕を掘り、家族はそれぞれ家族壕を掘つておりました。島に帰つてもない十月十日に沖縄はアメリカ軍の機動部隊に大空襲されたのです。

その日の朝七時頃起きて、洗面のため外へ出ますと、西側の空が異常なので、よくみると無数の飛行機が爆音をとどろかしながら、読谷飛行場に爆撃を加えているのでした。

これは大変だと思ひ家族みんなは、壕へ避難しました。そして朝食を壕へ運ぼうとする時にも飛行機が頭上を飛ぶので大変こわかつたけれどもその時は、宮城島の桃原部落には空襲はありませんでした。しかしすぐ向いの島の平安座島はやられております。

読谷飛行場は本格的に爆撃されていましたが、夕方頃になつて漸く爆音火のようにパツパツと光つていましたが、夕方頃になつて漸く爆音が遠のいていました。

その時、宮城島の女子青年団は読谷飛行場へ奉仕作業にかりだされていて、私の友人が作業中にひとりは爆死、もうひとりは片足を飛ばされてしまふという犠牲が出てしまいました。

摩文仁まで追われて

宮城島 嘉陽田 幸子（十七歳）

兵隊さんの慰問

太平洋戦争が始まつた時、私は国民学校の六年生でした。当時父は与那城村役場の収入役を勤めており、兄は青年学校の教師として働いておりました。

家族は、宮城島の桃原部落に住んでいて、母が農業をしておりました。

その頃、男は満二十歳になると徴兵検査があり、兵隊にとられかかりませんでした。

私たち児童生徒は、五年生以上に対し、月二回ぐらいの早起き会や奉仕作業がありました。そして兵隊さんの慰問ということで、兵舎を訪ねて洗濯をしたり、草取り、便所の汲み取りをして自分達がたがやした烟にそれをかけたりしました。

そして毎月八日には「ショウテン」といって、生徒に対して軍隊式の訓練が在郷軍人の指導の下になされました。行進や高学年に行くと銃剣術の訓練などがきびしく行なわれ、士気を高揚させていました。

それは道路上や学校の運動場などで行なわれるのが普通でした。

その後私は本島に出て高等女学校に進学しました。昭和十九年サ伊パン島などが陥落すると沖縄にも戦争が近づいて壕掘りが盛

長い間、微用にとられて家をあけていた男達が、空襲のあった晩に読谷から島まで、干潮を利用しながら歩いて帰つてきました。

那覇もほとんど焼かれてしまったので、島出身の友人の高等女学生が、島へ帰つてきておりました。

私が島へ帰つたのは、女学校での授業は一学期だけで、二学期に入ると、島尻で壕掘り作業だけやらされていましたので戦争が間近かに感じられ、こわくなつて親元の方へ帰つていつたのでした。それで空襲後も学校には帰えらず、島に残つておりました。

絶望的な情勢の緊迫

しかし大空襲後まもなく徴兵資格がこれまでの二十歳から私より先輩の十八歳に引き下げられたため、若い人たちももうほとんど兵隊、防衛隊に召集され、男子青年は島にはいなくなりました。こうして若い人たちを初め四十代の人たちまでそれぞの任務につかざるをえない程、情勢が悪化してきたので、昭和二十年に入つて大空襲後、子持ち以外は年寄りと子供しか残つていない島には、じつとしておれなくなり、もう「どうにでもなれ」という気持ちになつて、島に私同様残つていた同級生と一緒に学校へ戻り、壕掘り作業を続けることにしました。

空襲は連続して来ましたので、私は、ズキンにエプロン、救急袋を首にぶらさげた姿で那覇に向いました。学校では相変わらず、津嘉山、各地で友軍の壕掘り作業や陣地構築した後の土が露出した部分に、芝生を植えたりしておりました。

私の故郷の桃原部落は、海に面しており、軍用山原船が出入りしていました。それで、三月に入つてからのアメリカ軍上陸前空襲では、この山原船がねらい撃ちされたそうで、ついでに部落全体も爆撃されて全部の家が焼かれてしまい、その時の空襲で私の家も焼かれてしまったようです。

下宿先での日本兵

私は女学校時代、弁が岳に近い首里の鳥堀で下宿しておりました。

私の親類の家で、非常に教育熱心な人で農業を営んでいました。

私も学校から帰つてると自発的に手伝いをしておりました。その家によく友軍の兵隊が出入りをしておりました。その兵隊は沖縄の人を馬鹿にしたようなことをよく話しておりましたので一度言い返しました。あの時は長野県の農林学校を出たらしいけれどもここでは上官のくづみがきなんかをさせられているが、私の兄はあなたが馬鹿にしている沖縄の農林学校卒業だけど、今は広島で幹部候補生ですよ」とはつきりいってやつたら、その人はもう二度と私たちには沖縄の人を馬鹿にしたような話はしなくなりました。

私には、防衛隊に召集されている兄がいました。母は兄の無事を祈るために毎月普天間へ参拝して、またその足で首里にある私たちの祖先の本家にもお参りにきたので、母とは首里で会うことがたびたびありました。

艦砲射撃の激化

やつてきたので近所のおばさん達も交じえていろいろ話をしておりました。そこでひとりの兵隊は「敵はもう幸地のすぐ近くまできて

いるが、我々は夜間『一機一艦、一人十殺 戰車』の精神、つまり日本軍の飛行機一機で敵の軍艦一隻を沈め、日本兵一人で敵兵十人を殺し、戦車一台を壊すという精神で闘い、天長節（四月二十九日）までは敵軍を敗退させるのだ」と吹聴しておりました。もう一人の兵隊は北海道出身といふことでしたが、「僕のおふくろは国でどうしているんだろ」と寂しく話しておりましたので、私も急に母のことが心配になつてその兵隊に「宮城島はどうなつていますか」と尋ねると「宮城島はもう敵に占領されていますよ」と答えたのでびっくりして「住民はどうしていますか」と更にきくと「多分大丈夫でしょう」と返事しました。

私は、占領された島にいる母の安否が非常に気になって胸が一杯になり大声で泣き出しました。

ちょうどその時、ヒュッサー音がしたかと思うと目の前に坐つていて今まで私と話をしていた北海道出身の兵隊とその後方に坐つていた近所のおばさん、そのうしろのおばさんの子供の三人があつとう間にぎ倒されてしまいました。ラッキョウ型の砲弾が、兵隊の腹を突き抜けておばさんの横腹をかすめて幼い子供の身体の中でやつと止まつたのです。二人とも即死でした。爆発していたら全員即死だったでしょう。

兵隊の遺体は仲間のひとりが近くに埋葬したはずです。私達は、近所のおばさんの子供の遺体を近くに埋めてやりました。

その時は、飛行機の爆音、爆弾のさく裂する音が屋中鳴り響い

母は空襲や艦砲射撃が一段と激しくなった三月二十五日頃にそのような中をぐるつてお参りした後で、私の安否を心遣い島へ連れ戻すために下宿先を訪ねてきたそうだが、私は手伝いのために留守をしていましたので、母には会えず、母はそのまま島に帰ってしまいました。

その頃はアメリカ軍の上陸は時間の問題とされており、島尻の方から上陸するんだという情報が流れています。アメリカ軍のグラマン機が我がもの顔で飛び回わっており、B29が飛行雲を作りながら飛んでいました。

近くの弁が岳からは、嘉手納沖の海が見渡せたが、そこには無数の艦隊が沖縄を取り回しているのが見えました。日中は海岸近くに停泊しているが、夜になるとはるか沖合の方に退き、長距離砲で、一齊に射撃をして、夜空を花火のようになががしていました。敵は島尻からは上陸せずに嘉手納からついに上陸したという情報を探つて、家の近くの塚ではこわくなり、西原村幸地にある墓をあけて、そこを壕代りに使っていました。弁が岳には友軍の通信部隊がいたのでその附近は危険だったからそこからは逃げたわけです。しかし、屋は偵察機やボーリング機が飛び回つてどんどん爆撃を加え、夜は艦砲射撃をされて本当にいつ死ぬかわからないという状態で全く運を天にまかす以外にはありませんでした。

不発弾で即死

私は、墓に接して、その入口の方に仮小屋も作つてあります。四月二十日頃の昼過ぎ、その仮小屋の中に友軍の兵隊ふたりが

て、もうどこにも出れない状態の頭でした。

首里脱出

それから一週間も経たない内にアメリカ軍がもう幸地に攻めてきているという情報で、私は、島尻にでも逃げないといけないと思ひ首里を離れる決心をしました。

まず親類のおじさんが、様子をみてくることになり朝からでかけていつて晩には帰つきました。おじさんの報告によると、もうこの辺からは一刻も早く立退かないと危険だということでした。友軍もこの辺に沢山きており、女性は從軍看護婦としてみんな使われているので、おじさんは私に「あなたも南風原の陸軍病院に看護婦として行かないか」と云われましたが、私はとても臆病だったのでつても恐くて行けませんでした。

それで私はその夜の内に、西原村幸地を出て、首里の鳥堀から大里を経て南下しました。それ持てるだけの食糧を持って、な

おも夜道を歩いていました。三月の末頃からは夜間はほとんど照

明弾があげられていましたので、艦砲射撃があると身をふせたりしながら、その明りで道の見当をつけ進んでいました。

しかし、南風原の陸軍病院の手前に友軍の陣地があつて、その近くまで来た時、また照明弾があがつたかと思うと目の前で突如砲弾が「バーン」とさく裂して私達の一一行は散り散りになつてしましました。その時は、おじさん、おばさん、その次男の嫁さんと長男の子供と私の五人でしたけれど、気がついたら私は次男嫁さんと子供三人になつていました。無我夢中で歩いている内に軍の壕に辿り

つきました。

それからほどこへ行つたらいかわからなかつたが、その時は沢山の避難民が移動しておりましたので、みんなの中に混じつて、南風原から東風平へ夜通し歩いていました。夜中の二時頃、富盛部落へ着きましたが、その間、負傷兵を運んでいた兵隊やこれから戦闘へ出かけるという兵隊が一列に並んで行進していたので道は大勢の人々が行き交うため真夜中だというのにザワザワしていました。

私のいとこが、兵隊にとられて島尻にいると聞いていたのでもしか

したらその中に混じつているかも知れないと思つて注意深く兵隊の顔をみながら歩いていたが、暗いのとあまりにも沢山いたので到底探せませんでした。

富盛部落に着くと、そこにも来た沢山の兵隊がいて、負傷兵をタシカで運んだり、またそこは六か所位に道が分かれているので、兵隊が避難民などに道案内をしておりました。

更に私達三人は沢山の避難民に混じつて、下つていくと、八重瀬岳の向いにある具志頭小学校に辿りつきました。その時漸く夜も明けはじめる時刻になつていきました。このあたりは、首里のような艦砲射撃もなく、わりと平穏だったので、その日は、学校に休んで腹ごしらえしてから落ち着いたら、南風原で行方不明になつたおじさん、おばさんが気になつたので、また東風平に引き返えして搜してみようと思い立ち、具志頭小学校の近くにある橋にさしかかつた時、私達を捜しているおじさんにばつたり出会いました。

おじさんの話では、東風平村の世那城部落には、食糧も豊富にあり安全な壕も沢山あるのでそこへ行こうということになり、早速そ

その場所は、具志頭村と玉城村との境にある港川の中流に近い前川というところでした。

そこは、本当に良い自然壕でした。その自然の洞くつは、中が非常に広く、天井には大きなつらら状の鐘乳石がいくつも垂れ下がっている鐘乳洞でした。そして洞くつの中には水脈もありました。ですからそこでは炊事が不自由なくなるので大変便利でした。また艦砲の弾もこの壕に入っている限りは大丈夫でした。

港川の川を遡つて行くとその洞くつに至るのです、更にその上流の方で、当時部落の人たちは飲料水、洗濯用水など生活用水として使用していたようです。

大勢の避難民は、附近の畠からイモや野菜類などをとつて生活していましたので、部落の区長さんが私達の住んでいた自然壕へやつきて「あなたがた沢山の人たちが、ここで炊事などしていただアメリカ軍に見つかって爆撃されるから、知念村の方にでも出て行ってくれ」と嫌味などを云われたこともありました。しかしここは絶好の避難場所だったので出て行く人はひとりもいませんでした。

こうして三、四週間ぐらいここで過しました。その間、前川には大きな自然壕があるということをきいて、南風原で行方不明になつていたおばさんが親類の人と一緒にやってきてこの壕の中で再会しました。これで西原を出発して以来みんな無事にここまで生き延びれたのです。

の足で世那城部落へ向かいました。

その部落では、家族が避難して空家になつてゐる家を捜して、そこで四、五日ぐらいう生活しました。野菜類も豊富にあり食糧には困らなかつたが、艦砲や空襲が激しくなつてきたので、そのままここにいたら殺されると思い、壕を求めてすぐ近くの八重瀬岳に避難しました。しかしその安全そうな壕は全て友軍が入つておらず、私達民間人はとても入れませんでした。

土砂降りの中の壕捜し

避難民は、粗末な小屋を作つたり、岩と岩の間にただ木の枝をかけたり、あるいは岩陰に身をかくすことなどによつてアメリカ軍の激しい攻撃に耐えていました。しかしそれはほんの気休め程度のものであり、至近弾にあつても命を落としてしまうのは必至の状態でした。

避難民が次々やられていくのをみて、もうこれ以上はここにはおれないからといって、おじさんが安全な壕を捜しに行くといつて私達を残して出ていきました。

その頃は始終雨が降つており、その時もおじさんは土砂降りの雨の中を出でていったのですが、数時間後には、安全そうな立派な壕が見つかったよ、といつてずぶ濡れになつて戻つてきました。私達はほつとして、なんとか無事そこへ辿りつけないもんかと神に祈る気持ちで雨の中を出でいました。

絶好の避難場所

ました。

私はこの洞くつの奥十メートル位のところにいましたが、午前十時頃、突然水が出てきました。奥の二十メートル位は大きな洞あなになつていて、その奥は川になつていて天井も低いのでそこから更に奥には入つたことはありませんでした。私たちのいる洞あなの入口の両わきは木がおい茂つており、普段は地下から港川に水は流れ出ているが増水した時は私達避難民がいるところが大きな川になつて港川につながつていくという危険地帯にいたのです。そこへその日の朝早く「あがつき」部隊の小隊が、軍馬を數頭連れてこの洞くつの中に入つてきておりました。馬のたずなは入口の方にまで伸びてきている木の枝に結んでありました。

水が出てきたから私達は、荷物を洞くつの中の小高い岩の上の方に移動させておりました。この洞くつの中には、大小いくつかの岩がありました。もうそれぞれ自分の登つている岩からは身動きが取れないぐらいうず巻く潮流となつて激しい勢いで流れていました。

たちまち小さな岩にしがみついていた人達を呑み込んでしまい、あつという間に流されていました。気がついたら私の岩は急流の真中に孤立したかたちになつていました。おじさんは二メートルぐらいい離れた安全な場所に立つていました。孫をおんぶしているおば

さんは更に離れた孤立している岩にしがみついていました。次男の嫁さんは私と一緒に岩に立っていました。私は立っている小高い岩も次第に呑み込まれそうになりました。もう水は岩の一番上方まで達していました。

そこへおじさんが一本の角材を拽してきてくれました。運良く、私は立っている岩まで届く長さだったので、それを渡たして、まことに渡たり始めました。水はもうその木材すれすれまで増しておりました。私は、ふと学校で体育の時間に平均台の上を歩く練習をしたことを思い出し、急流の上を両手でバランスを取りながら、やつとの思いでおじさんの立っている所まで近づくことができました。おじさんの手が届くところまで達した時その手をとつて無事安全なところへ辿りつくことができました。

その間も、奥の方にいた兵隊子供、年寄りなど次から次へ足もたらこちらに身体を寄せ合つて呆然と坐り込んでいました。

私は亡くなつたおばさんの親類のかたと、身を寄せあつて、ぼんやりと亡くなつたおじさん、おばさんのことを考えていました。おじさんは私を助けてはくれたが、私の目の前で死んでいってしまつた。親類とはいっても遠縁にあたるかたなんだけど、本当に親身になっていろいろやさしく接してくれたおじさんが、もういなくなつてしまつたのだ。今まで砲弾の雨をかいくぐつてこれたのはおじさんがいろいろ考えてくれたからなんだ。

西原村の幸地を出でから、あんなに激しい艦砲の弾に誰ひとり負傷することもなく、安全な自然壕を見つけて、ここまで無事生きてきたのに、思いもかけず水で命を奪われ、私ひとり生きになつてしまつた。そう思うと、これまで全くおじさんに頼りきつていた私は、これから先この戦場をどうやって生きていつたら良いかわからず激しい不安に襲われました。

そしてまた私には二度と現われないほど、非常に親切でやさしかつたあのおじさんが、私を助けて下さったのに自分は流れに落ちてしまい死んでしまつたかと思うと本当にくやしくて、くやしくて仕方ありませんでした。

その後、私は夜通し泣き明かしました。

翌朝は、肉親を失いながら生き残った人々が、つい前日人馬を呑み込んでいったとは思えないほど静かな川原に沿つて、遺体捜しにかけました。私もこの曲がりくねつた川原におじさん達の遺体を求めて、洞くつを出でていきました。しばらく歩くとその川は、たん

潮流に呑み込まれてしまいました。瞬間の出来ごとでした。無理に手を伸ばして足をすべらしたのでしょう。

その後は、果然と時を過ごしほとんど何も覚えておりませんが、四時間ぐらい経つたらさしもの激流もやつと穏やかになり始め、どんどん水がひき始めました。

水が引くに従つて、岩にしがみついている人が、次第に姿を見せ始めました。その婦人は、私のおばさんの親類の人でした。そこは流れが急ではなかったのか、ほとんど意識を失いかけながらもなお、岩にしがみついて流されずに済んだのです。しかも臨月の身でした。生き残つた人が、水をはき出さして、無事命をとりとめました。

気がついてみたら、孫をおんぶしていたおばさんの姿は見えませんでした。いつ流されたのかは気がつきませんでした。

こうして、この奥行二〇メートル位の洞くつの中で、この世とは思えない地獄絵図がくりひろげられ、多くの人命を失い、生き残つたのは本当にわずかになつてしましました。

生き残つた避難民の中には、友軍の兵隊に救助されたのもいました。それは、次から次に人びとが激流に呑み込まれていた時、兵隊がロープを持ってきて、それを岩に立っている人に投げて、そのロープの端をつかまえることができた人は、自分の胴体にそのロープを巻きつけました。すると兵隊達数人が、そのロープをたぐりよせ激流の中から救いあげました。こうして幾人かは命拾いしたのです。

その晩は、残り水が、なおも小川のようにサラサラと流れるこの

ぼの間を流れおりました。そのあたりにくるともうおびただしい死体が、川の中やたんぽに引っかかつていました。その死体のひとりひとりをのぞき込むようにしておじさん達を探し回わつたけれど、なかなか見つかりませんでした。遺体は、幼ない子供、若い女性、年寄り、兵隊らしき人らの殆んどが、岩などに当たつてひきぎられたのか、眼ははぎとられ全裸に近い人がおおかたでした。

なおも捜し続けていた内に、やつとおじさんの遺体を見つけすぐに埋葬しました。残りの遺体も発見してすぐに埋葬してあげました。おばさんと次男の嫁さんは、港川の海岸近くまで探し回わつたがとうとう見つけることが出来ませんでした。おそらく海に押し流されたものと思い、あきらめて引返えました。

この洞くつの方から川原沿いにしばらくいくと大きなくぼみがあり、その上の方に、岩穴に石を積んだ壕（多分風葬墓では？）があるというので、おばさんの親類のかたと一緒に、大雨の時は、大変危険なこの洞くつを後にしてそこへ避難しました。

そこへ移動してまもなく、このかたは出産してしまいました。子供は無事生まれましたが、なんにもないようなんどころでお産をしなければならないなんて、戦争とはこうも恐ろしいものかとつづくをういました。

それから三、四日経つと、もうこの地域に対するアメリカ軍の爆撃が猛烈に激しくなつてしまつたので、ここで最後になるかも知れないと思いました。するところ壕に入つてゐる人が、「同じ死ぬのなら首里で死んだ方がいいのではないでしようか」と首里行きを説いたので、私もその気になつてここを去ることにしました。

再び首里を目指す

おじさん達の遺体を捜し回わたところを通り抜けて、具志頭部落の方へ向かいましたが、その間には、まだ埋葬されていない水死体が、黒ずんで大きくふくれあがったみじめな姿をみせていました。またあの時に親を失ったのか、幼ない子供が泣きじゃくつてオロオロしている哀れな姿も目にとまりました。

首里へ行くには、具志頭、糸満を経由して行くつもりでしたので、まず具志頭部落に出て更に歩いていると、友軍の兵隊達に出会いました。私は親のことは片時も忘れたことはなく、いつも気になつておりましたから、宮城島の消息を知りたくて話しかけてみました。その兵隊達は、「自分達は、勝連村の津堅島から、夜間クリ舟で、知念半島へ上陸してきたところだが、これから先、自分達はどうなるかもわからんよ」と話していました。私は「宮城島はどうなりましたか」と尋ねると、「もうとつにアメリカ軍が上陸しているよ」と答えたのを聞くと、私は、「親は死んでも、子供はこうしてまだ生きているのか」と悲嘆にくれて泣いてしまいました。

私は、首里へ向かう時、自然壕の近くでおじさんの姉夫婦とも偶然にお会いしたので、そのかたも一緒にでした。

摩文仁の方に近づくともうあたりは兵隊や民間人の重傷者や死体でゴロゴロしておりました。手足が吹き飛ばされているがまだ生きている者などが、またも降りしきる雨の中をみじめに横たわっていました。その道私は、雨にうたれながら、そのような人たちの上をまたいで歩かなければいけない時戦争とはこんなにむごたら

しいものなのか、もう戦争とは一度とあってはいけないと想いながら黙々と歩き続けました。

その時は、もう六月の初め頃でした。この摩文仁一帯に避難民や友軍は次第に追いつめられているところへ、アメリカ軍が空からも海からも無差別に猛爆撃を加えてきたので、死者や負傷者が続出したのです。

私達は、やむことのない砲弾の雨をくぐりながらなんとか真壁村の新垣部落に辿りつきました。ここは避難民で一杯でしたので、休まずに更に歩いて糸満のすぐ手前の国吉部落に着きましたと、前にも増して避難民でごったがえしております。

首里行きを断念

ここで糸満のすぐ近くまでアメリカ軍が攻め込んでおり、到底首里まで行くことはできないということがわかりました。もう日が暮れて雨も降っているのに、あまりにも沢山の避難民で一杯でしたから、また新垣部落に引返しました。そしてひとつ民家に何十人もの避難民で一杯しているところへ私達も割り込んでいてそこで夜を明かすことにしました。ここでは、身動きがとれない程ぎつしり詰め込んで坐わりながら、ワイワイガヤガヤして、自分は中城のどこそこから来たとかお互いのこれまでの無事を喜び合うかのように見知らぬ者どうしで話合つておりました。

私達は、こんなに沢山の人達と一緒にいたらかえって危ないと想い、明日は安全な壕を捜しに行こうと話合つてから眠りました。

翌朝早く起きるとすぐに壕を捜しにでかけ真壁部落に入りました。

壕は友軍が入っているので結局またカヤ葺きの民家に、他の避難民と共に寝泊まりすることにしました。

ついに被弾

飛行機からの爆撃、友軍とアメリカ軍との撃ち合い、夜間の艦砲射撃などで一日中騒がしい中を私達はこの部落で二日目を過していく時、ついに避難先の民家の庭先に直撃弾がヒュルルルーと飛んで来たかと思うとすごい音をたてて爆発しました。

私は片足に激痛が走り、ぶつたおれました。飛び散った破片のひとつが足にくい込んだのです。たちまちおびただしい血が流れ出ました。意識をしつかりさせて私は自分の首にかけてある救急袋から包帯を取り出し、なるべく心臓に近い太ももを、力をふりしぼつてぎゅっとしめつけ、止血に努めました。

まもなく意識を失つてしまつたが、気がついたら親類のおばさん夫婦が、この屋敷にある馬小屋に私を戸板に乗せて運んでくれてありました。大量の出血をしたせいか、大変なのどの渴きを覚えました。

その時、多数の犠牲者が出ておりました。ある首里の人が破片に腹をえぐりとられて、腸が飛び出て即死したのを初め、頭や手足などに傷を負いながらも一命をとりとめるなど多数の人が多かれ少なかれ負傷しました。親類のおばさん夫婦は幸い無事でした。

再び被弾

ところがその翌日、今度は直撃弾が私の寝ている馬小屋に落下し

ました。

幸い馬小屋の壁は石垣作りになつていて、その外側に落ちたために即死は免がれましたが、しかしその積み上げてある石が私の寝ている近くへ吹き飛ばされ、同時に飛んできた破片のひとつが、昨日痛めた、足のひざ小僧に入り、二重に負傷してしまいました。その上、避難中、ずっと使ってきた学生時代の毛布が、くずれ落ちた石の下敷きになつて、引き裂かれてしまいました。

スペイ呼ばわり

その避難先には、山部隊の兵隊も民間人に混じつて多数避難していました。その中には負傷兵もいましたが、彼等は私達に「おい／きさまら沖縄人はアメリカのスペイだ／お前達のために日本軍は敗けたのだ！」と喚いていました。私達に対するスペイ呼ばわりは、私にとって大変なショックでしたので今でもはつきり覚えていきます。

そして自分達は閉じ込もつて沖縄の防衛隊員に「おい／イモを掘つてこい！」とかいろいろ命令しているのをみて非常に腹が立ちます。

私は片足に二度にわたつて被弾してしまつもうちつことは勿論のこと這つことすらできませんでした。

私は片足に二度にわたつて被弾してしまつもうちつことは勿論のこと這つことすらできませんでした。

私と一緒にいた避難民は、ここにいては危険だから島尻のはてまで逃げることにして、私ともう一人識名からきたという婦人に「あなたがたはここにいときなさい」と云い残して立ち去つてしましました。その婦人は私同様負傷して歩くことはできませんでした

が、水飲み場までは這うことができました。

二人残された後も、続々と避難民が通り去って行きました。ときどき見知らぬ避難民の中には、私達二人を哀れんで、おにぎりをめぐんでくれる人がいました。そのおにぎりを二人で分けあって食べたりして、なんとか飢えをしのいでいました。

友軍の一団もまたやつてきたかと思うと摩文仁の方へ去っていきました。その時兵隊が「沖縄はもう駄目だよ。私達は追われているから出でいくよ」といつて食糧をちよつとくれました。

重傷の身で捕虜

私が負傷して四、五日経った頃、もうこの周辺には、日本軍を追いつめたアメリカ軍が押し寄せてきていました。戦車がゴウゴウと地響きを立てて走り回わっている音が聞こえていました。

午前十時頃、アメリカ兵が私達に近寄ってきました。日本語をたどたどしく話せる一人のアメリカ兵が「ムスマタチ、アシガイタイノカ」と言つてパンやバターをくれました。私はその時は、ほとんど飲まず食わずの状態でしたが、初めてみるアメリカ人に驚いてただガタガタふるえていました。そしてワンピースも持つてきてくれました。あれこれおしゃべりしてそのまま立ち去つてしましましたが、今度は夕方もう一度やつてきました。その時は、タンカを持つてきて、私達をそれに乗せてトラックにあげ、薺屋武岬に近い山城部落に連れて行かれました。

トラックで運ばれている間中どこかで殺されるものと思い恐ろしさでふるえていました。

しかし私は、間もなく宜野座村の惣慶収容所に更に移動させられました。
収容所で病床生活
そこでは、食事は一日に二度しか与えられず、晩は大豆だけなので、栄養失調になつて毛も抜け落ち、やせ細つてひとりで便所にも行けない様な状態になっていました。

私の受けた傷は、いつも良くならず歩くこともできない状態だったのですが、一番面白くなかったことは、米軍の衛生兵にいじめられたことです。
その米兵は、学生らしき人には反感を持つていて、私に對して「ユー、ジャペニーズ、ジャペニーズ」といつて、注射器で水をかけたり、たいたりするので、泣かされました。
しかし、学生ではない人には、本国からの本人への贈物を分けてあげたりしておりました。

故郷の宮城島が見えるこの収容所で、早く帰りたいと思つても傷は一ヶ月経つても良くならないので、通訳の人を通して軍医さんに診てもらつたら、直ぐに手術することになり、全身麻酔をかけられ、足に未だ残っていた破片を取り出してくれました。手術後、未

その部落には多数の避難民が集められていました。部落の広場

に、アメリカが小石を並べて境界線をこしらえ、そこに男女別々に

ふり分けられ、その晩はそこでみんな野宿しました。

そこでは、白いヒゲの白人兵が私に日本語で話しかけてきました。

「本籍ドコ?」と聞くので「宮城島です」と答えると「宮城島ワタシ知ッテイル友達沢山イル、川前サン吉田サン知ッテイル」と話していました。その人の名は私も知つてゐる人達でした。更に私の名前を聞くので偽名を使つたら、それを書いている様でした。

そこでは二晩程過ごしました。そこでは更にトラックに乗せられ

糸満の近くの伊良波収容所に運ばれました。そこには沢山の避難民がおりました。ケガ人はケガ人だけのテントに収容されました。日本兵は、持物は全部取り上げられ禪一本で集められていました。

こうして移動させられている時でも、いつも家族や同級生の安否が気になっておりました。

この収容所には朝着いたのですが、ひと息入れる間もなく、すぐに中頭の嘉真良の収容所に運ばれました。そこでも病人専用テントに収容されましたが、私をタンカで運んだのは日本兵捕虜でした。その人が云うには「私は硫黄島で捕虜になつて、こうして沖縄に連れて来られてこんなことをさせられているんだよ」とのことでした。

家族の消息

この収容所でも私は一週間位しかおりませんでした。しかしここで家族の消息が偶然にわきました。

ある日、見知らぬ男性が「勝連出身の人はおりませんか」と大声

だ意識が回復していない時、あのいじ悪な衛生兵は私をベットからわざと落としていたとまわりの人が話しておりました。
一般に階級が上の人は親切でした。私を手術してくれた軍医さんは、大変親切な方でした。手術後の措置も充分診てもらえたので徐々に歩けるようになりました。
だいぶ良くなつたので軍病院を退院して、一般の収容所に入りました。

平成市長の新垣金造さんに偶然お会いしたので、私が健在であることを伝言して下さるよう頼んだから、手紙を書く様にいわれて、それを父のところに届けて貰いました。

収容所の生活は、負傷している上に身寄りのいない私には大変苦しいものでした。一握りの米と少量のみその配給しかありませんでしたし、水汲みや薪取りも各人でしなければなりませんでした。まだびっこを引いて漸く歩ける状態の私にはとてもできませんでしたが、首里の下宿先の知人に偶然逢え、その人が私を見かねて助けて下さいました。薪も水もその人から分けて貰いました。野菜などが不足して、それそれ夜こつそりと野良に盗みに行つておりました。そうこうする内に一ヶ月経つと、ひっこを引きながらも逃出ができるようになりましたので、みんなと一緒に海岸に浴びに行つたり、福山に新取りに行つたりすることができるようになりました。

もうその頃は、ホンダワラ、ヨモギ、シロバラセンドラン草など今では雑草として道端にはえているようなものまで、食べれるものだけたら何んでも取つて食べておりました。

ある日勝連村南風原の方に引取人のいる人は、そこへ移動することができることになりました。私は、早く両親のもとに帰りたくて泣いて暮らしていたけど、南風原には身寄りはないので途方にくれました。すると宮城出身で収容所で巡回をしている人が運転手に「この娘も南風原まで連れていくつてくれ」と頼んで下さったの

で、みんなと一緒に南風原まで行くのはできました。そこでは引取人達が大勢つめかけておりましたが、私には引取人がいる訳はなく、その場合はまた元のところへ戻されると聞いていたので、ひとり泣いていると、まわりの人達が心配してあれこれ尋ね、私が上地の娘だとわかると「お父さんと連絡がとれるまで私のところへいらつしゃい」と何人もの人が声をかけて下さったので、無事移動できました。

そして父との連絡は平安座一屋慶名を往き来している海上トラックに乗っている通訳に頼んだから、うまく連絡がとれて、南風原滞在一週間位で父に会えました。

平安座の「イナガーバンタ」の浜でいつも私のことを思いだしていたという母とも再会でき、まもなく桃原部落に引揚げました。

故郷での生活は、家は焼け落ちていたので掘立小屋のワラ敷生活から始まりました。

戦争で受けた傷の後遺症は、二十八年経った今でもちよつと無理して疲れても左足が完全には伸ばせない程ですし、首里で下宿していた同郷の友人が一緒に弁が岳の通信部隊の近くで艦砲射撃にあって、はぐれてしまい、その後消息がつかめないので亡くなつたものでした。十・十空襲では、浜比嘉島も相当やられました。死傷者はひとりもいませんでしたが、家屋は、部落全体の半分程焼かれました。十・十空襲以後、何回も空襲がありましたが、我々は、いつも山中の壕に隠れて、平安座島を爆撃するのをみていました。津堅島上空を飛んできた飛行機が、我々の頭上をかすめるような低空で飛んで、平安座島にある一〇〇隻近い山原船めがけて、爆撃を加えてその殆んどを炎上させたうえに、今度は民家にも爆撃をして、だいぶ燃やしてしまったのを目撃しました。

サバニで疎開

アメリカ軍が上陸する以前に、浜比嘉島にも疎開命令が来ました。約半数近くの住民が国頭方面に疎開しましたが、それは屋慶名から荷馬車で行く者もあつたが、その殆んどは海上をサバニ（クリ舟）で漢那方面に渡つてそこからは歩いてそれの目的地へ行くという方法が、とられました。そして途中、空襲にあり、衣料品を全部焼かれてしまい、はだか同然でまた浜比嘉島に舞い戻つてくる人もだいぶいました。

疎開にも行かないで島に残つた者は、どうせアメリカ軍が上陸して、どちらみち生きてはおれないから、どこへ行つても同じだ、どうせ死ぬのなら生まれ育つたところで死んだ方がましだということで残つた者がおおかたでした。私の場合は、渡し番をしているため

として家族は法事もしているようですが、私はその友人のことがいつも気になつており、ついきのうも彼女に出逢つた夢をみました。「生きていたのならなんでもっと早く連絡取つてくれなかつたの」と私が話しかけておりました。

浜の渡し番

浜比嘉島 柴引英二（三五歳）

十・十空襲前後

私は、戦争の始まるずっと以前から、サバニ（クリ舟）で浜一屋慶名間の渡し番（渡し船の船頭）をしておりました。ですから防衛隊にもとられずにすみました。しかし戦争が緊迫してくると読谷飛行場作りの作業にかりだされましたが当時は子供と年寄りばかりしか残つていなかつたので、私以外に浜部落には、渡し番できる者がいなかつた。それで住民や村当局が非常に困つてしまつて、結局一週間程の徵用で、呼び戻され、相変わらず渡し番を勤めていました。

浜比嘉島には、十・十空襲以前大阪出身の友軍が十名位、守備隊として山の方におりましたが、住民から食糧の供出を強要することはありませんでした。

壕は、山の手の方に各自で掘つてありましたし、立派な自然壕が沢山ありましたので、壕には心配なかつたです。青年会、婦人会を中心にして竹ヤリ訓練もみんな受けましたが、それは部落の人があつて山の方におりました。そこで住民から食糧の供出を強要することはありませんでした。

とうとう、島に残つた者は、疎開した者に較べると苦労は少なかつたようです。

米軍の浜比嘉島上陸

アメリカ軍の浜比嘉島上陸の模様は、我々島の者は、みな山中の壕や、木の繁みの中からみていました。まずアメリカ軍は、屋慶名から、引き潮を利用して、数十台の戦車をつらねて、平安座島を占領しました。それをみた我々は、次は我々が占領されて殺されてしまうのかと懸念しました。數十台の戦車がどうどう音を立てて突き進んで行くのを見ると本当に恐ろしくなりました。

ところが予期していたとおり、平安座島を占領したアメリカ軍は、次には、平安座島から浜比嘉島へ向かつてきたのです。多分、水陸両用戦車だったらしく、約十台近い戦車が海を渡つてきて、浜の海岸へやつてきました。

アメリカ軍は通訳を連れてきて、危害は加えないから全員山や壕から出てくるように命令しました。又島の人たちは海外移民帰りが多くて、英語を話せる年寄りもかなりいたので、その人たちを通して投降を呼びかけていました。元気な者は、アメリカ軍が戦車でくるのをみると、山の奥深くに逃げこんで二、三日隠れていました。が、アメリカ軍は島に常駐することもなく、平安座に帰つてしまい、また住民に危害を加えることもないことがわかり、みんな山や壕から降りてきました。それ以後アメリカ軍は、島にはあがつてきませんでした。

浜比嘉島は、他に比べると楽だったとはいえ、空襲のたびに、墓の中や、壕に閉じこもって生活するのは大変でした。私には子供は三人いました。上の子が七歳で、下の子が三歳でした。特に下の子は、その頃イリガサ（はしか）に患り、熱発しているのに、じめじめした壕の中に身をひそめて爆撃をまぬがれるのは大変でした。しかし食糧は貯えてあったので、そんなにひもじい思いはしませんでした。

米軍による小舟の爆破

空襲が激しくなってから、島から脱出しようとした人の中には、アメリカの軍艦にそのサバニ（くり舟）を見つけられて、その人はちは軍艦に引き上げられ、舟は爆破され、屋嘉の収容所へ捕虜にとられる人もかなりいました。アメリカ軍は、舟は、見つけ次第爆破しました。私の舟は、家の近くのくわの木の繁みの中に隠してあったので、終戦後も大丈夫を使いました。

安全な浜比嘉

伊計、宮城島の人たちは、平安座島に収容されました。浜比嘉島の場合は、アメリカ軍が上陸後も、一か所に収容されることもなく、前に役場で仕事をしていた人、村長をやったこともある山根さんという人らが指導者となって、全員学校に集まり、そこで班分けをして、各班毎に農耕を続けました。その時は、誰それの畑ということもなく、全員平等でした。アメリカ軍任命の赤帽子（沖縄人警官）が、島から選ばれて、彼らを通じて、平敷屋、平安座からアメリカ軍往来を阻む米軍

これは、きっと平敷屋にいるアメリカ軍と連絡が不十分だったために、ヤミ舟と感違いために射撃されたのだろうと思いまして、それでも、あやうく一命を落とすところでした。

それで平安座へ行って、事情を説明して、「二世」に同行してもらいました。それ以後配給もらいに行ってそのような目にあうことはありませんでした。

帰りたいから、是非舟を出してくれと、非常に頼み込まれて、ことわることができなくなり、その人の家族や家財道具一切をサバニにつめ込んで、宮城島の桃原に着いたところ、アメリカ軍が待ちかまえていて、捕えられてしまいました。

そして舟は引き上げられて、通訳を通じてきびしい尋問を受けました。「誰の命令があつて、どうしてやつてきたのか」などと、翌日になつても帰えしてもらえず、大変なことになってしまったところが、桃原を出てまもなく、平安座島との中間あたりまできました。私を本当に殺す気はなかつたと思いますが、それ以後は、誰がどんなに頼み込んで、もう二度と、勝手に舟を出すまいと決めました。本当に命が縮まる思いをしました。

た時、突然、アメリカ兵が、私めがけて、「パラパラパラ」と拳銃で撃つきました。あまりのことにつ「タマシスギティ」（びっくり仰天して）櫛も落としてしまい、ほほうのいで島へたどりつきました。私を本当に殺す気はなかつたと思いますが、それ以後は、誰がどんなに頼み込んで、もう二度と、勝手に舟を出すまいと決めました。本当に命が縮まる思いをしました。

リカ軍配給の食糧品も沢山もらいました。

浜比嘉島は安全らしいということで、津堅島、宮城島からも沢山の避難民がやってきました。その人たちにも食糧はわけてあげ、一緒に生活しました。ですから浜比嘉は、沢山の人でした。

また、島尻まで追われた防衛隊の人たちの中には、泳ぎの自信のある人は、夜中にマブニを脱出して、木切れにつかまって、久高島に渡たり、そこから津堅島へ、津堅から浜比嘉島へたどりついた者が八人程いました。その人たちにも食糧をあげて、一緒に生活しました。

食糧品の配給

アメリカ軍からの食糧品の配給をもらいに行くのは我々の仕事でした。

爆破をまぬがれたサバニが、私の舟も含めて十隻位残つておりましたので、それぞれに元気なものが、三、四名ずつ乗つて、そのうちにアメリカ軍との連絡係みたいな「赤帽子」が一人乗つて、初めて、平敷屋に配給をもらいに行こうとした時、「ダダダッ」と機銃掃射を受けてしまい、その弾丸が運悪く、「赤帽子」に一発あたり負傷しました。みんなは、あわくつてあわてて海に飛び込み、なおもしつように弾が飛んでくる中を舟蔭に身を隠しながら、左手は舟べりをつかみ、右手で泳ぎながら敷地島の方へ逃げ込みました。そして夜になつて、なお、そのように泳ぎながら、屋慶名港まで舟を持っていました。

敗残兵の捜索

日本兵搜しのアメリカ兵が、たまに通訳を連れて、島に来ることもありました。そして農作業をしている者の中から、ちょっととも色白の男は、日本兵に違いないといって、引きたてて行こうとしました。実際にそれは沖縄青年でしたから、島出身の通訳が、それは日本兵ではないと、申し立てて収容所に連れて行かれずにすみました。が、島で、十四、五名位の人がそのような目にあいました。

我々は、イモ、野菜はもちろんのこと、魚でも、少しでも被れたら、みんなで食べるようになりました。お互い助け合つたのです。

私は、一度、津堅島が気になつて、ひとりで行ってみようとしたが、そこは日本軍の強固な陣地ができていたので、爆撃も激しく、とても近づけませんでした。海岸近くに多くの壘壕をこしらえてあり、島の防衛隊もかなり抵抗したところで、アメリカ軍は上陸の際、一個小隊程が全滅したそうです。島の住民は、日本軍がいるから危険だということで、だいぶ疎開して、その大部分が浜比嘉島に避難してきました。

伊計島守備隊

伊計島 平 識 善 光 (二九歳)

民間人に変装

戦時中、伊計島は約一五〇戸、人口千名位の島でした。そして、宮城島をすぐ目の前にした伊計城跡に日本軍の守備隊が陣地を作つた。

てありました。その守備隊は右部隊で、召集兵の私は、この部隊に配属されておりました。

この部隊は通信部隊であり、首里、勝連村の平敷屋、伊計、石川などにある部隊を通信で結ぶのが主な仕事でいわば中継基地でした。

十・十空襲前頃には六、七〇名位いた部隊は、我々伊計島出身兵十五、六名位を残してみんな引き揚げてしまいました。
そして伊計島出身兵だけで伊計島守備隊を編成して島にとどまるよう命令が下されたのです。そこで仕事を以前のとおり軍事通信の連絡を中継するのが主でした。

十・十空襲の時は、我々の兵舎も民家もだいぶ焼夷弾で焼き払われてしましました。そのうえ、住民がひとり、機銃でうたれてしまい、その傷がもとで傷風にかかり、十日後には死んでしまいました。

その後、たびたび伊計島も空襲に見舞われ、民家が焼失し、さらに戦況が悪化しアメリカ軍が、沖縄に上陸するかも知れないということで、上方から疎開命令が出されました。

十・十空襲前まではこの島でも軍事徴用がひんぱんに行なわれ、多くの住民が、読谷飛行場づくりにかりだされましたが、情勢が緊迫してからは、ほとんど徴用でかりだされることはなくなりました。

また農産物の供出も、空襲が始まつてからは、避難壕住まいが多くなり、収穫は少なくなつていきましたから、それどころではなかつたようです。

島の住民は、当時、牛、馬、豚、山羊、ニワトリなどをどの世帯

壕に武器弾薬をかくしておきました。すぐ近くまで宮城島住民が、避難壕を作つてあり、よく出入りしておりましたので我々の存在もわかっていたものと思います。

ところで、宮城島で得た情報によると、アメリカ軍は、もう屋慶名まで迫つてきているところで、我々は海岸の壕の中で作戦を練つたが、この小人数の部隊でしかも船らしい船もないのに、どうにも身動きがとれず、本島で戦闘に参加することは「やめとこう」ということにしました。

米軍の伊計・宮城島上陸

それから数日経つとアメリカ軍は、我々がひそんでいる宮城島へ上陸してきました。「トゥンナハ」とよんでいる浜で、伊計島寄りのところです。ほとんど同時に、伊計島の西海岸の方にもアメリカ軍は上陸した様子でした。

伊計島出身の小隊長は、宮城島へ上陸したアメリカ軍に夜間斬込みを行こうと提案したが、それは私が強硬に反対しました。アメリカ軍には大量の武器弾薬があるし、しかも戦車數十台で島へ乗り込んできているからとも我々には勝目はない。なによりも、アメリカ軍は今のところ住民には、何んにもやつていないが、我々が刺激することによって、住民を巻添えにして殺してしまってちがいなと思つたからです。

夜間斬込みの取止め

私の意見にみんな賛同して、結局斬込みは取止めることになり、

でも数多く銅つておりましたが、疎開命令が出されてからは、それらを放つたままほとんどの人が、クリフや村が準備したマーラン船（山原船）で、國頭の方へ避難してしまいました。島に残つた住民はほんのわずかばかりの人たちでした。それは老人世帯とか、病気がちの人たちばかりで避難生活に耐えられないような人たちがほとんどでした。

おかげで我々は、島に食糧がないまま残されたわけですから、なんの不自由ありませんでした。ほとんど毎日、卵や肉類にもあります。

そしてまもなく、「北中城村の仲順、喜告場で敵軍の進撃をくい

とめるよう」命令が下されました。その時私がこの命令を受信しました。それで我々十五、六名の小隊は、クリフで、本島屋慶名へ渡たり、そして命令どおり戦闘に参加するため、それぞれ武装して、壕を出て、いざ海を渡つたら、肝心なクリフが、アメリカ軍の爆撃できれいに片づけられてしまつたのです。

我々は、上の命令に背くわけにはいかないので、ともかく対岸の宮城島まではなんとか渡ろうということになり、破壊されたクリフを修繕してなんとか宮城島へ弾薬や兵器も運び込むことができました。宮城島合戦には、アメリカ軍艦が停泊しており、屋は偵察機がよく飛んでいるので、全て夜間行動でした。

宮城島では、人目の少ない海岸の岩陰に身をひそめ、海岸の自然夜間にまた折をみて伊計島へ引き揚げ、武器弾薬を二か所に分散して隠しておいた。一か所は、それを水ガメの中に入れ、宮城島対岸の民家の床下に深さ五尺ぐらゐの穴を掘つてそれを埋めた。もう一か所は、伊計城跡の自然壕の中にかくし、我々は、武装解除して、民間人に変装して疎開せずに残つていた住民に混じつて、なにくわぬ顔で生活しておりました。

民間人としての生活

伊計島上陸後のアメリカ軍は、島に残つてゐる住民を、次々と避難壕から出していき住民を殺すことはしないといつてタバコなどをやつていたそうです。

我々が島へ帰つて生活するようになつてからもアメリカ軍は、住民にはなんにも害を及ぼすことなく、通信基地としての陣地を作つておいた。そして民間地域の道端に、タバコや小さなツルハシなどを置いて、翌日それが失くなつてゐるか確かめにきたりなどして、いろいろ住民の動静をさゞつてゐる様子でした。

これらアメリカ軍は、住民の宣撫工作をつとめたので、アメリカ軍は住民に危害を加えないといふわざが、國頭に避難している住民の間でも次第にひろまり、國頭の東海岸近くに避難していた伊計島の避難民は、南部では戦闘の真最中だがクリフを利用してだいぶ引き揚げてきました。

島ではこれら住民とアメリカ軍との間にはなんの事件も起つておらず、生活を続けておりました。

日本軍の米軍陣地斬込み

ところが、友軍が次第に南部へ造いつめられるにつれて、砲弾が不足してきたのか、与論島を足場に小舟で砲弾を運ぶことがありました。ところが地理に不案内なため方角を間違えて、伊計島のアメリカ軍陣地のところへ上陸してそこをねらいうちされるとのことが増えました。

そしてまた、北部国頭地方にいる友軍が、小舟で夜間に、伊計島のアメリカ軍陣地に斬込みをかけてくることもしばしば起こりました。

さらに、摩文仁の方から与論島を経由して本土へ脱出を計るうとする日本兵がクリ舟で流れつくるもありました。

このようにしてこの伊計島へ上陸しようとした日本兵を、民間人に変装している我々がかくまつて、彼等を目的地へ送り出したこともあります。

多くの場合、アメリカ軍陣地の裏正面に上陸しようとしてうち殺されてしまいました。そして私は、アメリカ軍にかりだされて、これら日本兵の死体を海から引き揚げる仕事をさせられました。

しかしアメリカ軍は、伊計島上陸を强行しようとした日本兵の数を確認しており、死体がその数だけ揚がらない場合は、島に上陸したものと判断して、島内を捜索したりするようになった。その中には実際に我々がかくまつていたり、さらにクリ舟で送り出したりした者がいたわけだから、アメリカ軍が確認した数とかれらが射殺された数は一致するはずはなかった。そのことでアメリカ軍に疑惑を抱かせた。

平安座島へ退去命令

アメリカ軍が伊計島上陸後数週間経ったある日突然、住民全員に対する平安座島へ退去命令が下された。つまりここで初めて我々は捕虜にとられたかたちになった。平安座島は平安座、伊計、宮城島住民のほかに、本島の避難民も加えて民間人捕虜収容所となつたのである。

我々の本当に苦しい生活がその日から始まった。たいして農作物のない島に沢山の住民が住むようになつたわけですから、みんなひどい目にあいました。

当然我々も民間人に変装しているわけですから全員平安座島に収容されました。

しかしあまりにも食糧難になつたのですから、伊計、宮城島住民の場合は、特別に頼み込んで人数を制限して、島へ食糧を取りに帰えることが許されました。それは厳重な警戒のもとでなされといふことはありませんでしたので、ある程度自由な行動がとれました。

収容所の中に武器搬入

我々は、軍人としての任務を完全に放棄した気持ちにはなれなかつたので、軍服、軍人手帳、兵器、弾丸をなんとか平安座島へ持ち込もうと計画した。

私の弟も同じく守備隊員でしたので、弟と二人で食糧とりに島へ帰えられた時に、民家へ隠してあった兵器類を掘り出して、大きな水ガメに軍服や兵器類一式詰め込んで完全に密封して、そのなかに

はみそが入っているようにみせかけて、伊計島からそれを持ち出すことに成功しました。

そして帰えりは平安座島の人里離れた海岸近くに大きな穴を掘つてそれを埋めて、なにくわぬ顔してみんなのところには帰えりました。

しかしそれからといふものは、何時自分が軍人であり、又隠してある兵器類が発見されはせんかと毎日毎日が不安でなりませんでした。私の場合は、食糧難で苦しい日にあうよりも、そのことの方が非常に苦しかった。

アメリカ軍は、住民を追い出した後は、あんなに沢山あつた家畜類をほとんど野に放してしまいました。彼等自身で料理して食べてしまつたのもだいぶいたはずです。

米軍の家屋放火

それから日本兵を捜索するつもりか全くの気まぐれからかはつきりはわかりませんが、かわら葺きの立派な家には、ほとんど火をつけて燃やしてしまいました。我々が、日本兵をかくまつていたのはほぼ確実にわかっていたはずですから、恐らくは、それに対する報復の意味で、いやがらせにやつたのかも知れません。

伊計島の住民も平安座島に収容されてからほぼ六ヶ月ぐらい経つてから島へ帰えることが許されました。私は島へ帰える二、三日前、弟と一緒に兵器類を埋めてある場所へこつそり行って、掘り起こしてみました。するともうすでに大部分は、潮の影響でかボロボロになつておりました。

私は島へ引き揚げてからは、今までずっと漁業で生計を立ててきました。